

年 次 報 告 書

2018

Annual Report 2018



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター



年 次 報 告 書
2018

Annual Report 2018



まなびのカフェ

中学生・高校生をはじめとした一般の方々に、教員・大学院生・学部生が、研究内容をわかりやすく伝え、参加者と共に語りあい、対話の場をつくります。



まなびのカフェ

人間科学セミナー

人間科学研究科教員や、大学内外の研究者によるセミナー（研究講演）を、市民にも開放することで、異分野交流を発展させると共に地域との交流を深めます。



人間科学セミナー

多様な活動 社会 貢献をめ



ランチトーク



ランチトーク

昼休みに食事をしながら気楽に行う学部生・大学院生の研究プレゼンテーションや、哲学カフェ形式でのコミュニケーションなどを通して、学生どうしの“つながり”をつくります。



「シリーズ人間科学」



「シリーズ人間科学」の出版

“食べる・助ける・感じる”などをテーマにし、“人の暮らし”を題材に、人間科学研究科の学際的な研究内容を紹介する本をシリーズで出版します。

公開講座



研究者と市民が“つどう”ことを目的とした公開講座。講演だけでなく、教員・スタッフ・学生と市民が共に語り合う場をつくり、実践的な“つながり”をめざします。



公開講座



出張授業

出張授業

高等学校だけでなく小・中学校でも、自身の研究テーマをわかりやすく発表したり、語ったりする出張授業を、教員・学部生・大学院生の協働により実施します。



をとおして
への
ざします



コンポジウム



コンポジウム

コンサートとシンポジウムを融合させたコンポジウム。教員を中心に、学部生・大学院生も参加し、音楽と講演を通して研究者と市民の学び合いの場をつくります。



「私の一冊」

「私の一冊」の発行

学部1年生に読んでほしい本を、教員がひとり1冊ずつ紹介し、冊子にまとめました。教員と学部生が共感し話題が生まれる“きっかけ”をつくります。



目 次

はじめに	1
I. 組織の概要	2
1. 未来共創センター設立の経緯と背景	2
2. 活動目的と概要	3
3. 運営体制	5
II. 活動報告	6
1. 人間科学セミナー	11
2. ランチトーク	25
3. English Skill-up Session	29
4. 冊子『私の一冊』の作成と配付	33
5. 小・中・高大連携	35
6. 公開講座	37
7. 第1回人間科学フロンティア公開講座	39
8. 未来共創センター公開シンポジウム 第1回	43
9. まなびのカフェ	46
10. 箕面まなびのカフェとコンポジウム	56
11. 「シリーズ人間科学」の刊行	57
12. 大阪大学オムニサイト（OOS）	59
13. 未来共創センター会議 Ethnography Lab 活動報告	63
14. 海外インターンシップ・ボランティア	65
15. 大阪府教育委員会と大阪大学の協働による 「外国にルーツをもつ府立高等学校生徒への支援」	66
16. 仮留 ^{かす} める、仮想 ^{かさ} ねる——津波に流された写真の行方	67
17. 未来共創フィールド実習 I	69
18. 学生の活動と単位化	70
19. 未来共創センター 学生の声	71

はじめに

未来共創センターの3年目が終わりました。この1年間の活動を冊子としてまとめ、報告いたします。

人間科学部・研究科の「現場に寄り添い、課題を探り、その課題解決に向けた学際的な視点からの研究活動の成果」を学内外に発信しながら、人間科学研究科と外部の結節点となることを目指した附属未来共創センターが2016年4月にスタートしました。研究科内の教員、学生の多様な出会いと連携を生み出し、新たな学問領域の開拓を支援することも、当センターの目的です。そして、これらの活動を通して、学部学生・大学院生に向けて多様な学びの場を提供することも目指しています。当センターの3年目の活動も、これまでと同様に手探りではありましたが、順調に展開することができたと思います。その内容を、この報告書でご確認いただければ幸いです。

また今年度は、従来の活動に加え、OOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社会学連携活動の拡充に努めました。これまでのセンターの活動が、「研究成果の社会発信」を主に目指すものとするなら、OOSによる連携・協働活動は、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を試みるものです。この活動はまだまだ緒についたばかりですが、今後は本未来共創センターの活動の中核を担うものと位置づけたいと考えています。

当センターの活動の趣旨を御理解いただき、ご支援をいただいた多くの方々に御礼を申し上げますとともに、次年度以降の継続したご支援をお願いする次第です。さらに、本報告書をご覧になった皆様方が、私たちセンターの活動に加わっていただければこれほどうれしいことはございません。何卒よろしくお願い申し上げます。

当センターの設立から2年間にわたりセンター長を務められた中道 正之教授からバトンを受け、今年度より私志水がセンター長の任務を仰せつかっています。何とかセンターの活動を軌道に乗せ、「人間科学研究科に未来共創センターあり」と呼ばれるような存在に高めていくという夢の実現に向け、新年度も頑張っていきたいと考えています。これからも、多くの方々がセンターの活動に参画し、当センターが創造的かつ実践的な活動拠点に育っていくことを願っています。

2019年3月31日

未来共創センター長 志水 宏吉

I. 組織の概要

1 未来共創センター設立の経緯と背景

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。4年後には大学院も設置され、当初から設置されている人間科学専攻（4学系：行動学系、社会学系、人間学系、教育学系）と2007年に大阪大学と大阪外国語大学の統合によって設置されたグローバル人間学専攻（1学系：グローバル人間学系）の2専攻5学系体制で、教育研究を展開してきました。

しかしながら、現代社会の急激な構造変動とそれに伴う人間生活の本質的な変化の中で、人間科学部・研究科が創設以来、最重要視してきた「自らの専門領域を深化させながら、俯瞰的な視点を持って、異なる学問領域との多様な連携と融合を実践する学際的な教育・研究活動」をさらに推し進めなければならないと認識するに至りました。そのために、新しい枠組みが必要であると、私たちは結論しました。

そこで、本研究科では従来の2専攻5学系体制から、1専攻4学系体制に改編することを決定しました。具体的には、人間科学専攻（行動学系、社会学系、人間学系、教育学系の4学系）とグローバル人間学専攻（グローバル人間学系の1学系）の2専攻を、人間科学専攻（行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系）の1専攻にしました。

新組織としての人間科学専攻には、新しい学問領域としての「共生学」の開拓を目指して、従来の5学系の教員が参集して「共生学系」を創設します。今日の多様化する社会においては、紛争、大規模災害、環境汚染、貧困、高齢化、格差などあらゆる問題が生じ、人々の間に、あるいは社会に様々なレベルでの軋轢を生みだしています。それゆえに、「人種、民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障がいなどの違いを有する人々が、その違いを認めながら、共に生きること」である「共生」を学際的に研究する「共生学」の構築を、本研究科は目指すことになりました。

本研究科は、従来から、国内外の大学や研究機関との国際共同研究や、学内の他部局との共同研究を積極的に展開し、「現場に寄り添いながら、文理融合的で学際的な研究活動」を展開してきました。この機能を一層強化するため、今回の新体制への移行に際して、本研究科と大阪大学他部局、国内外の大学・研究機関、NPO・NGO等多様な団体、さらには市民社会をつなぐ「結節点」として、本研究科内に「未来共創センター」を新たに設置しました。



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター

2 活動目的と概要

【活動目的】

本センターは、本研究科教員の個別の学問領域における研究の機能強化だけでなく、異なる研究領域の研究者との接触や協働を通して、新たな融合的学問領域の展開と、国内外の現場に寄り添った実践的な教育研究活動の実現を目指します。

学部学生や大学院生は、本センターが企画・運営する公開講座、セミナーやまなびのカフェ、さらに学術図書の企画・出版等の事業に参加することで、研究成果の一般社会への還元方法やコミュニケーション力・対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力などの実践的能力を身に着けることが期待できます。さらに、本センターの多様な活動を、高校生や地域住民の方々に対しても発信し、高大連携と社学連携の発展に貢献します。

【活動概要】

1. 人間科学セミナー：人間科学研究科教員を中心に、大学内外の研究者による研究講演を、市民にも開放して実施する。
2. ランチトーク：まなびのカフェの研究科内版。昼休みに、食事をしながら、大学院生と学部生が研究内容を語る。専門分野内の会話ではなく、専門外の人に語り、質問することを、気軽に楽しむ場。
3. English Skill-up Session：国際学会をイメージし、学生が英語で自身の研究について発表を行う。英語で発表を行い、質疑応答の場を設けることで、発表者だけでなく参加者の英語力向上を図る。
4. 小・中・高大連携：人間科学研究科教員、大学院生、学部生との協働で、小・中・高校生に自身の研究をわかりやすく伝える。
5. 公開講座：人間科学研究科教員を中心に、学内外の研究者と市民を結ぶ場を創る公開講座を1回実施する。なお、教員からの一方的な講演だけでなく、講演終了後に、講演した教員、スタッフ、学生、市民らとの歓談の場を設け、実践的な交流を目指す。
6. 人間科学フロンティア公開講座：人間科学をフィールドにおく様々な大学の教員が自身の最新の研究を専門外の人にむけて発表を行う。教員や参加者との交流をはかり、その中で人間科学の最先端の研究について話し合う場。
7. 公開シンポジウム：今回は、共生社会を創造していくための産官社学連携の仕組みである【OOS（大阪大学オムニサイト）】を締結した組織が集い、産官社学連携で共創知を生

みだす仕組み、知と人のキュレーションについての議論を行った。

8. まなびのカフェ：人間科学研究科教員と大学院生・学部生が協働し、箕面市国際交流協会や應徳院とも連携をとり、中・高校生と保護者に研究をわかりやすく語り、対話する場をつくる。
9. コンポジウム：「コンサート」と「シンポジウム」を合わせた造語。人間科学研究科教員を中心に、学部・大学院生も補助的に加わり、音楽と講演を通して、研究者と市民の学び合いの場を提供する。
10. シリーズ『人間科学』の刊行：「食べる」「助ける」「感じる」などの人の暮らしをタイトルにして、人間科学研究科の学際的な研究内容を高校生以上の読者を対象に紹介するシリーズ本の出版。
11. 大阪大学オムニサイト：年に数回行われる活動を通じた、大学外の企業、行政、民間組織などと連携する仕組みづくり。活動を通して得られるデータの収集や分析を通して、企業・行政・一般市民・研究機関・学生それぞれに価値を提供する仕組みを目指す。
12. エスノグラフィラボ：エスノグラフィーと呼ばれる研究手法を大学内や大学外で促進する事を目的とした、大学生と教員が対等な役割で運営する組織。
13. 海外インターンシップ・ボランティア：JICA が行うボランティア事業に学生の海外派遣事業を行う。
14. 大阪府教育委員会と大阪大学の協働による「外国にルーツをもつ府立高等学校生徒への支援」：大阪府の府立高等学校に在籍する外国にルーツをもつ生徒に対し、学校における学習と生活を支援するべく、大阪大学と大阪府教育委員会が連携し、各高等学校から示された個々の生徒のニーズに応じて、大阪大学の学生を派遣する。
15. 写真展・トークセッション「仮留^{かす}める、仮想^{かさ}ねるー津波に流された写真の行方^{ゆくえ}ー」：東日本大震災で津波に流され、持ち主が分からなくなった写真の展示会。大阪大学と外部プロジェクトの「思い出サルベージ」による共同主催。
16. 未来共創フィールド実習：実習で訪れた地域の高齢者との交流や、道の駅での聞き取り等を行い、高齢化している山間地の現状を体感し、その地域の福祉や活性化について考えることで、実習科目としての認定を行う未来共創センターが管轄する新科目。

3 運営体制（平成 30 年度）

○未来共創センター構成員

・未来共創センター

志水 宏吉 教授[センター長]（兼）
渥美 公秀 教授[副センター長]（兼）
岡田 千あき 准教授
中野 良彦 准教授
孫 美幸 講師
稲場 圭信 教授（兼）
河森 正人 教授（兼）
白川 千尋 教授（兼）
高田 一宏 教授（兼）
中道 正之 教授（兼）
岡部 美香 准教授（兼）
森田 敦郎 准教授（兼）
山田 雅代 事務補佐員
岡田 智子 事務補佐員（2018 年 10 月から 2019 年 1 月まで）
蔭山 裕子 事務補佐員（2019 年 2 月より）

国際交流室

Scott North 教授 [室長]
安元 佐織 講師
藤田 直生 事務補佐員

学生支援室

入戸野 宏 教授 [室長]
前馬 優策 講師

サイバーメディア室

西森 年寿 教授 [室長]
宮本 友介 助教
Spence Zaorski 助教
中尾 朋子 事務補佐員

Ⅱ. 活動報告

未来共創センター 平成 30 年度 活動概要

① 人間科学セミナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・14 回実施延べ 678 名参加

4 月 19 日	「なぜ移民政策が確立されないのか？：現代日本における移民をめぐる政治とリベラル・トリレンマ」（高谷 幸 准教授）
5 月 15 日	「私立大学のマネジメントと職員の役割」（西川 幸穂 学校法人立命館大学常務理事（総務担当））
5 月 17 日	「『食べる』における身体・脳・心の対話」（八十島 安伸 教授）
6 月 14 日	「人権教育の今」（高田 一宏 教授）
7 月 5 日	「月経をめぐる生理現象、文化的慣習、開発課題の狭間で」（杉田 映理 准教授）
7 月 6 日	「グラフォセントリズムと漢字文化圏の思考法―拙著『話すことと書くことの間にある教育一道と脱構築の境界を超えて』を執筆して―」（供如玉 台湾 國立嘉義大學教授）※英語講演
7 月 25 日	「GENETICS OF AGING:HOW TO MODULATE LONGEVITY HAWAII STYLE」（Allsopp Richard 博士）※英語講演
10 月 11 日	「外国人・移民の教育課題を考える」（園山 大祐 教授）
10 月 11 日	「日本における今後の高等教育政策について」（石橋 晶 文部科学省・高等教育局企画官）
11 月 8 日	「学習環境デザインの現在」（西森 年寿 教授）
12 月 6 日	「公教育システムの社会的意義を考える」（中澤 渉 教授）
1 月 24 日	「子供たちの可能性を開く教育・学校とは―日本の大学入試のため(だけ)の学校を超えて―」（日野田直彦 武蔵野大学中学校・高等学校校長）
3 月 16 日	「盗む、不倫する、妖術師になる―フローレス島から自由意志について考える」（中川 敏 教授）
3 月 16 日	「メタ認知の心理学―私がメタ認知を研究する理由」（三宮 真智子 教授）

② ランチトーク

（大学院生、学生による研究発表、意見交換：インターナショナルカフェ）・・・5 回実施

5 月 10 日	「クリエイションとことば」
5 月 22 日	「海外国際学会で研究発表をしてみよう」
7 月 3 日	「視知覚研究と、社会」
7 月 17 日	「現場経験と研究：青年海外協力隊編」
11 月 19 日	「映画と芸術療法～監督ルネ・ラルーとラ・ボルド病院における実践～」

③ English Skill-up Session

(大学院生、学生による英語論文発表、意見交換：インターナショナルカフェ)・・・2回実施

11月26日	「INTERNATIONAL PARTNERSHIP STRATEGIES AND PRACTICES AT 4 CASE STUDY GLOBAL RESEARCH UNIVERSITIES IN SINGAPORE AND JAPAN」
11月26日	「Disaster preparedness in the ageing society: Ten years on from the 2008 Sichuan Earthquake」
3月12日	「Internationalization of Higher Education and English Medium Instruction in Japan, South Korea, and Mongolia: Case studies of six private universities」
3月12日	「The effect of unusual first-names in impression formation in Japan」

④ 「私の一冊」・・・400部発行、人間科学研究科教員や学部生等に配布。

⑤ 小・中・高大連携

(高校での模擬授業など。教員だけでなく、学生も参加。小、中学校でも実施)

・・・17回実施(センターが対応したもののみ)

6月14日	・兵庫県立小野高校出張授業	中井 准教授：大阪大学大学院人間科学研究科・院生 1 名
6月14日	・関西大倉高校出張授業	中道 教授・学部生 1 名
7月12日	・京都市立勸修中学校 1 年生出張授業	孫 講師・院生 1 名・学部生 2 名
7月30日	・岡山県立岡山一宮高校 1 年生(参加者：80 名)サルの観察実習	中道 教授
8月6日	・大阪教育大学附属天王寺中学校学生 1 名研究室訪問	澤村 教授
8月28日	・仁川学院中学校模擬授業	中野 准教授・後藤 助教
10月9日	・大阪府立千里高校出張授業	山田 講師・院生 1 名
10月26日	・京都市立勸修中学校出張授業	孫 講師・院生 2 名
10月29日	・関西学院千里高校出張授業	渥美 教授
10月31日	・箕面市立豊川南小学校出張授業	孫 講師・院生 3 名
11月12日	・大阪府立高津高校模擬授業	澤村 教授
11月13日	・大阪府立高津高校模擬授業	狭間 特任研究員
11月24日	・関西大倉高校 1 年生出張授業	中道 教授
12月7日	・正智深谷高校出張授業	稲場 教授
12月29日	・岡山県立勝山高校サルの行動観察実習	中道 教授
1月30日	・箕面市立豊川南小学校出張授業	孫 講師・院生 2 名
2月6日	・兵庫県立三田祥雲館高等学校出張授業	澤村 教授

⑥ 公開講座・・・・・・1回実施 51名参加

11月17日「助ける」：キャノピーホール

・講師：白川 千尋 教授

吉椿 雅道 氏 CODE 海外災害援助市民センター事務局長

・コーディネーター：渥美 公秀 教授

⑦ 人間科学フロンティア公開講座・・・・・・1回実施 32名参加

9月17日「最新データからみる階層と社会意識―共生社会の実現に向けて―」

：大阪大学 中之島センター

・講師：小林 大祐 金沢大学 人間社会研究域 准教授

金澤 悠介 立命館大学 産業社会学部 准教授

三谷 はるよ 龍谷大学 社会学部 講師

石田 淳 関西学院大学 社会学部 教授

狭間 諒多朗 特任研究員

・討論者：渥美 公秀 教授

稲場 圭信 教授

⑧ 公開シンポジウム・・・・・・1回実施 124名参加

1月17日「知と人のキュレーションで創る共生社会」：キャノピーホール

・講師：上田 眞 パナソニックホームズ株式会社街づくり事業部分譲事業推進部長

渥美 公秀 教授

幸田 栄長 一般社団法人全国自治会活動支援ネット理事長

・コーディネーター：志水 宏吉 教授

・パネリスト：小田 祐士 岩手県九戸郡野田村 村長

寺本 弘伸 日本災害救援ボランティアネットワーク常務理事

石川 浩二 NTN株式会社 執行役員

栗本 英世 教授

稲場 圭信 教授

⑨ まなびのカフェ・・・・・・・・・・14 回実施延べ 401 名参加

5月 15 日	「夫源病予防のためには―熟年離婚の遠因となる産後クライシス」 應典院（石蔵 文信 教授）
6月 7 日	「それ私にも効くの？の科学―健康情報とのつきあい方」 茨木市生涯学習センター（木村 友美 教授）
6月 12 日	「怒りは厄介なものなのか？―「怒りの氷山」の下にあるもの」 應典院（藤岡 淳子 教授）
6月 12 日	「学校・園と周辺住民とのトラブル―「子どもの声は騒音かもしれない」」 應典院（小野田 正利 教授）
6月 12 日	「あなたも加害者になってしまう？―インターネット上での攻撃行動の心理学」 應典院（寺口 司 教授）
9月 9 日	「日米比較からみた子育てアプローチ」 箕面市立多文化交流センター（安元 佐織 氏）
10月 31 日	「子育てを支援する人たち―西成区で子育て支援をされているみなさんを中心に」 應典院（村上 靖彦 教授）
11月 3 日	「食えることと身の回りの化学物質―ダイオキシン、内分泌かく乱化学物質、化学物質過敏症ってなに？」 茨木市生涯学習センター（三好 恵真子 教授）
11月 14 日	「身近な危機と子どもへのケア―「こころの救急箱」を作ろう」 應典院（野坂 祐子 准教授）
11月 28 日	「国際化する教室―子どもたちの学びをどう支えるか？」 應典院（孫 美幸 氏・伊藤 莉央 氏）
12月 12 日	「子どもの事故予防―冬、年末年始の事故から子どもを守る」 應典院（岡 真裕美 氏）
12月 16 日	「「食える」ことをみつめる臨床心理学―こころと食のアラカルト」 茨木市生涯学習センター（竹田 剛 氏・佐々木 淳 准教授）
2月 3 日	「薬と共に生きる―錠に詰め込まれた世界」 茨木市生涯学習センター（モハーチニゲルゲイ 准教授）
3月 3 日	「多言語・多文化で生きる子どもたち」 箕面市立多文化交流センター（孫 美幸 氏・カルロス・オチャンテ 氏・千葉 泉 教授）

⑩ コンポジウム・・・・・・・・・・3月3日まなびのカフェとして1 回実施

⑪ 「シリーズ人間科学」・・・・・・・・第2 巻『助ける』第3 巻『感じる』を2019 年3 月に刊行

⑫ 大阪大学オムニサイト・・・・・・・・新たに5 つの組織と締結

⑬ エスノグラフィラボ・・・・・・・・教育、文理融合、社会学連携、国際連携、広報を実施

⑭ 海外インターンシップ・ボランティア・・・・・・・・学生の募集、面接を実施

- ⑮ 大阪府教育委員会と大阪大学の協働による
「外国にルーツをもつ府立高等学校生徒への支援」・・・年間に渡って学生を派遣

- ⑯ 写真展・トークセッション
「^{かす}仮留める、^{かま}仮想ねる-津波に流された写真の行方^{ゆくえ}」・・・1回実施

- ⑰ 未来共創フィールド実習・・・1回実施1名参加

⑱ その他（未来共創センターの共催等）

5月29日	・人間科学研究科生涯教育学 （THE BIG ISSUE とサッカー）	講師：川上 翔氏： NPO 法人ビッグイシュー基金
6月8日	・第13回SDP研究会 （開発と平和のためのスポーツ研究会）	講師：横田 直道氏：読売巨人軍
6月15日	・第14回SDP研究会 （開発と平和のためのスポーツ研究会）	講師：鈴木 直文氏：一橋大学
7月6日	・第15回SDP研究会 （開発と平和のためのスポーツ研究会）	講師：富田 欣和氏：慶應義塾大学
7月13日	・第16回SDP研究会 （開発と平和のためのスポーツ研究会）	講師：山平 芳美氏：国際武道大学
9月29日	・一般社団法人真庭市医師会・真庭市教育委員会主催 真庭市民学習講座	講師：中道 教授
10月6日	・連続講座第6回「移民二世からの研究発信」 （上智大学グローバルコンサーン研究所）	講師：下地ローレンス 吉孝氏 ：港区立男女平等参画センター、 ケイン 樹里安氏 ：大阪市立大学都市文化研究センター ・桃山学院大学・大阪国際大学
10月27日	・大阪府主催「自転車マナーアップキャンペーン 反射板作成ワークショップ」	岡特任研究員
12月4日	・SDP研究会 （開発と平和のためのスポーツ研究会）主催 「オランダに学ぶ、新しいコミュニティの形 社会課題解決をスポーツで」	講師：Mr.Wessel Schaling:Life Goals Foundation、鈴木 直文氏 ：一橋大学、糸数 温子氏 ：一般社団法人 daimon
12月5～7日	・SDP研究会 （開発と平和のためのスポーツ研究会）	主催「ソーシャルスポーツコーチ講習体験会」
12月8日	・連続講座第7回「移民二世からの研究発信」 （上智大学グローバルコンサーン研究所）	講師：徳森 りま氏 ：早稲田大学大学院修了、仲田 幸 司 Enrique 氏：大阪大学大学院
2月21日	・グローバルイニシアティブ・センター公開講演会「Sustainable Society, Japan」	講師：Prof. John Lie:Sociology Department, University of California, Berkeley
3月17日	・生き方死に方を考える社会フォーラム公開シンポジウム「少子高齢化社会と男の介護」	講師：津止 正敏教授 ：立命館大学産業社会学部

1 人間科学セミナー

○第 17 回人間科学セミナー

『なぜ移民政策が確立されないのか？：現代日本における移民をめぐる政治とリベラル・トリレンマ』

講 演 者：高谷 幸 准教授（社会学・人間学系 社会環境学講座 現代社会と社会理論）

日 時：2018 年 4 月 19 日（木）15：00～16：30

場 所：人間科学研究科 北館 2 F ラーニングコモンズ

参加者数：39 名

【概 要】

日本に暮らす外国籍者の数は 2017 年には 250 万人を超え、また移住労働者の数も 2016 年に初めて 100 万人を超えた。こうした移住者・移住労働者の増加の背景には、東日本大震災からの復興や東京五輪の準備など短期的な労働力の逼迫のみならず、高齢化による労働力人口の減少という長期的な傾向があると考えられる。

しかし日本では、「移民」をめぐるイシューは、ほとんど政治的課題として認識されておらず、公式の移民政策も確立されていない。移住者が増加する一方で、未だに公式の移民政策が回避されるのはなぜか。本報告では、政治システムに焦点を当て、その要因を検討した。具体的には、移民の受け入れをめぐるのは、リベラリズムにおける経済的自由、政治的自由、国際人権という論理が緊張関係になること、日本の議会政治においてもこの緊張関係が表れ、結果として移民政策の提起を妨げていることを指摘した。

【講演者紹介】

京都大学大学院人間・環境学研究科修了。岡山大学准教授等を経て、2016 年より現職。専門者社会学・移民研究。近年の主な著作は『追放と抵抗のポリティクス：戦後日本の境界と非正規移民』ナカニシヤ出版（2017）、「「外国人労働者」から「不法滞在者」へ」『社会学評論』（2018）、「なぜ移民政策が確立されないのか」『理論と動態』10（2018）、「現代日本における国際結婚女性のシティズンシップとジェンダー構造」安里和晃編『国際移動と親密圏』京都大学学術出版会（2018）など。

○第 18 回人間科学セミナー

『私立大学のマネジメントと職員の役割』

講 演 者：西川 幸穂 学校法人立命館常務理事

日 時：2018 年 5 月 15 日（火）16：20～17：55

場 所：本館 5 階 キャノピーホール

参加者数：85 名

【概 要】

これからの大学は、社会の変化を先導し、知的基盤社会の中心的な役割を担うことが期待されている。そのためには社会の変化に即したマネジメントが重要であり、教員のみならず事務職員の高度化、そして教職協働が必要とされている。国立大学よりも予算の多くを学生からの納付金に依存する私立大学では、このような大学のマネジメントはステークホルダーに満足してもらうことが特徴であり、学生や父母の満足度を高めるための教職員の意識の改革が進んでいる。

職員が教育や学生支援に関わることが強く望まれ、教職協働は、教員から求められたことでなく、職員側から生まれた。学校法人立命館では、業務会議制度、入試制度改革（職員が監督し、全国で実施する入試）、課外活動の副部長には職員が就く、リエゾンオフィスによる産学相互に意味のある関係性の構築などを実施してきた。

これからの変革、改革は外からやってくるであろうし、量的拡大から質的転換へ変わって、学長のリーダーシップを支える仕組みを具体化せねばならない。職員は、基本的な力に加えて、ある程度の期間、深く掘り下げた専門的な領域をもつ必要があり、モデルのない大学改革の時代において、大学の将来像を描くことが必要である。さらに個の力を伸ばすことで組織の力を高めることが必要である。

以上のプレゼンテーションを受けて、フロアからは教職協働や私立大学と国立大学の違いについて質問が寄せられた。

なお、本セミナーは、高度副プログラム「大学マネジメント力養成・向上プログラム」が提供する「大学マネジメント論特講Ⅰ（担当：川端亮・齊藤貴浩）」の一つの講義として提供された。

【講演者紹介】

学校法人立命館常務理事（総務担当）。

学校法人立命館において 2009 年総務部長、2013 年人事部長、2016 年社会連携部長兼務、2017 年より現職。2015 年から 2017 年まで、プロフェッショナルとしての大学行政管理職員の確立を目指す教職員の集まりである大学行政管理学会（会員数 1,400 名）の会長として活躍。

○第 19 回人間科学セミナー

『『食べる』と身体・脳・心の対話』

講 演 者：八十島 安伸 教授（行動学系 行動生態学講座 行動生理学）

日 時：2018 年 5 月 17 日（木）15：00～16：30

場 所：人間科学研究科 北館 2 F ラーニングcommons

参加者数：45 名

【概 要】

本セミナーでは、『食べる』という行動に関わる身体や脳の生物学的な機能について、現在までに解明されている知見の概要を紹介した後、食べ過ぎの脳メカニズムに関して、我々の動物実験から得られた研究成果から解説した。特に、摂食抑制系に関わる脳腸相関における可塑的な変化が食習慣や食事パターンによって生じてしまうことを物質レベルや細胞レベルのデータから示した。さらに、行動生理学の研究から得られる知見がヒトにおける『食べる』という行動に関わる医学・発達心理学・心身医学・臨床心理学との今後どのような接点を持ち得るのかについても私見を述べた。それらについて、フロアからの活発な質疑応答を行い、食の人間科学における拡がりについて参加者と情報共有を行った。

【講演者紹介】

1967 年愛知県生まれ。1995 年大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程退学、2003 年博士（人間科学）。福島県立医科大学講師、大阪大学大学院人間科学研究科准教授を経て、2017 年から同教授。日本味と匂学会評議員。20 年以上にわたり、ラット・マウスにおける味覚の好き嫌いの脳基盤をさまざまな研究手法を用いて探究してきた。現在、食べ過ぎや拒食などの食行動異常を生じさせ、かつ、維持させる生理基盤を解明するために、動物モデル系における行動神経科学的研究に取り組んでいる。

○第 20 回人間科学セミナー 『人権教育の今』

講 演 者：高田 一宏 教授（教育学系 教育環境学講座 教育文化学）

日 時：2018 年 6 月 14 日（木）15：00～

場 所：人間科学研究科 北館 2 F ラーニングコモンズ

参加者数：43 名

【概 要】

今回のセミナーでは、1990 年代以降の同和教育・人権教育の歩みを振り返り、人権教育の今日課題を考えた。戦後の同和教育にはふたつの課題があった。そのひとつは、部落の児童・生徒の教育権保障（就学・学力・進路の保障）、もうひとつは、あらゆる児童・生徒の人権意識の向上（部落差別意識の解消）である。1990 年代後半以降、同和教育を人権教育へと再構築する動きが加速したが、それには「光と影」の両面があった。「光」の面とは、多様な人権課題が取り上げられるようになって同和教育の裾野が広がったこと、同和教育の理論と方法の普遍化を志向する研究と実践が現れたことである。「影」の面とは、差別の不可視化がすすんだこと、教育権保障の観点が人権教育から欠落してしまったことである。今、人権教育には、子どもの貧困対策の動向をふまえて教育権保障を再定位するとともに、児童・生徒が自らの生活に引きつけて人権の概念をとらえられるようにすること（無関係論の克服）が求められている。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科教授。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（人間科学）。大阪大学人間科学部助手、姫路工業大学環境人間学部講師、大阪大学大学院人間科学研究科准教授などを経て、現職。専門は、教育社会学、同和教育・学力保障論、コミュニティ教育論。主な著書・論文に、『教育コミュニティの創造』（明治図書、2005 年）、『マインド・ザ・ギャップ！』（志水宏吉との共編著、大阪大学出版会、2016 年）、「部落問題と教育－見えない排除－」志水宏吉編『社会のなかの教育』（岩波講座「教育 変革への展望」第 2 巻、岩波書店、2016 年）などがある。最近は、貧困・社会的排除・差別に抗する教育のあり方について、教育・福祉連携の視点から研究をしている。

○第 21 回人間科学セミナー

『月経をめぐる生理現象、文化的慣習、開発課題の狭間で』

講 演 者：杉田 映理 准教授（共生学系/グローバル共生学講座/国際協力学）

日 時：2018 年 7 月 5 日（木）15：00～16：30

場 所：人間科学研究科 北館 2 F ラーニングコモンズ

参加者数：34 名

【概 要】

本セミナーでは、月経（生理）という一見きわめてプライベートな問題を多角的に捉えた上で、月経がなぜ国際開発の課題とされているのかを紹介した。月経は、人間(ヒト)の女性の身体におきる一般的な生理現象である一方、それぞれの社会によって月経の捉えられ方は多様であり、ローカルな文化・慣習が存在する。世界各地で形は異なりながらも、月経中の女性や経血に対するケガレ観は強く、月経をめぐるタブーが多く地域で見られる。そして地域によっては女子学生が月経中に学校を欠席するなどの状況がある。月経対処が国際開発の目標である女子就学率の向上を阻害する要因として問題視した国際開発機関は、適切な月経対処を開発課題として含むようになったのである。本セミナーでは、発表者自身が調査対象としているウガンダにおける月経を巡る状況を、開発がどのような形で入ってきているのか、現地の文化や女子学生の視点をふまえるとどのようなことが懸念されるのかを考えた。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科グローバル共生学講座国際協力学准教授。フロリダ大学人類学部修了（Ph.D.）。国際協力機構（JICA）職員、同客員国際協力専門員、東洋大学国際地域学部准教授、東洋大学国際学部教授などを経て現職。専門は、開発人類学、水・衛生（トイレ・手洗い・月経対処）分野の国際協力、アフリカ地域研究。最近は、学校保健における衛生教育・月経教育、国内の災害時におけるトイレ問題にも関心を持っている。主な著書・論文に、「月経はどのように捉えられ経験されるのか：月経対処が開発アジェンダになる中で、ウガンダの事例から考える」『東洋大学大学院紀要』（2016）、「水と衛生：人びとの命と生活を衛るために」勝間靖編『テキスト国際開発論』（2012）ミネルヴァ書房、「エミクな視点から見えるトイレの問題：現地社会の内側からの理解とは」佐藤寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学』（2011）明石書店。

○第 22 回人間科学セミナー

『グラフォセントリズムと漢字文化圏の思考法』

——拙著『話すことと書くことの間にある教育一道と脱構築の境界を超えて』を執筆して

Graphocentrism and Chinese Way of Thinking

From Writing the Book “Education between Speech and Writing: Crossing the Boundaries of Dao and Deconstruction”

講演者：洪如玉 教授（台湾 国立嘉義大學）

Professor Ruyi Hung, National Chiayi University

日時：2018 年 7 月 6 日（金）13：00～15：00

場所：人間科学研究科 東館 304 講義室

参加者数：17 名 ＊英語での講演



【概要】

ヨーロッパとは対照的に、東アジアの漢字文化圏では、街中はもちろんテレビの画面にも「文字」が溢れている。観光地には、地名や史跡の漢字表記が岩や木に彫ってあることもある。さらには、著名人の直筆による地名や史跡や故事の表記にプレミアがつくこともある。こうした Wordaholic（文字中毒）とも言える文化は、デリダの言を借りるなら、西洋が phonocentrism（音声中心主義）であるのに対して、graphocentrism（文字中心主義）ということができる。ただし、デリダが言うように、logocentrism や ethnocentrism と容易に結びつく phonocentrism を東洋の graphocentrism が批判的に超克しているか、あるいは超克し得るかと言えば、一概にそうとは言えない。漢字表記に人々がどのような意味を見出してきたかをその誕生から振り返るなら、漢字は、ある時は、世界の真理の秘密を明らかにする魔力を秘めたものとして、またある時は、その漢字を書く人の人格や道徳性を示すものとして、人々にとっては規範的に、かつ規制的に作用してきた。とはいえ、近年では、漢字の従来の使用を超えた活用が主に芸術の領域で散見されるようになってきている。そうした postgraphocentrism とも言える動向は、今後、phonocentrism や graphocentrism を批判的に超克する契機になるかもしれない。

【講演者紹介】

台湾 国立嘉義大学・教育学部・教授 台湾教育哲学会・常任理事

Philosophy of Education Society of Australasia の学会誌 Educational Philosophy and Theory のアジア地区代表編集委員

○第 23 回人間科学セミナー

『Genetics of Aging- How to Modulate Longevity Hawaii Style』

講演者：Allsopp Richard 博士

(Richard Allsopp, Associate Professor of University of Hawai'i)

日時：2018 年 7 月 25 日 (水) 18:00~19:30

場所：人間科学研究科 本館 1 F インターナショナルカフェ

参加者数：23 名

【概 要】

高齢化が進展する現在、健康長寿の要因を探索する研究が様々な研究領域で行われている。本報告は、長寿に関連する遺伝子として有望な FOXO3 に関する研究を細胞レベルの研究からヒトを対象とした疫学レベルの研究まで網羅的に紹介するものであった。FOXO3 は、転写因子であり直接特定のたんぱく質の合成に関与するものではないが、様々な遺伝子の発現を調整する役割を担っている。遺伝子の対立アレルは G 型と T 型であり、G 型を持っていると余命が長くなる可能性が高いことが報告されて以来、多くの研究でその効果が再現されている。例えば、報告者が関与しているハワイにおける日系人の男性を対象とした長期追跡調査研究 (Honolulu Heart Program として 1965 年に開始された) と Health ABC Study (1997 に開始された健康長寿に関する縦断研究) では、9 年間の追跡期間における総死亡率は、G 型を持っている個人で 10% 低かった。さらに、冠動脈性心臓疾患による死亡のみに注目すると 26% 死亡率を下げることが分かった。また、エイジングの生物学的マーカーとして知られているテロメア長は G 型を持っている方が長く保たれていることも分かった。

このように、長寿に対して FOXO3 は重要な役割を果たすが、遺伝子だけですべてが説明できるわけではない。食生活と FOXO3 遺伝子の多型の関係を見ると、G 型を持っていることよりも、健康的な食生活をしている方が死亡率が低いことが分かった。また、マウスの実験ではアスタキサンチンを摂取すると FOXO3 の活性化が亢進することも分かってきた。今後 FOXO3 の生体内で働きの詳細を検討することで、健康長寿への方略を明らかにできると考えている。

【講演者紹介】

Associate Professor, tenured, at the Institute for Biogenesis Research, Department of Anatomy & Reproductive Biology of the John A. Burns School of Medicine at the University of Hawaii at Manoa.

大阪大学招へい研究員



○第 24 回人間科学セミナー

『外国人・移民の教育課題を考える』

講 演 者：園山 大祐 教授（教育学系 教育環境学講座 教育制度学分野）

日 時：2018 年 10 月 11 日（木）15：00～16：30

場 所：人間科学研究科 北館 2 F ラーニングcommons

参加者数：22 名

【概 要】

日本には移民政策は不要と言うが本当にそれでいいのだろうか。日本国憲法第 26 条において外国籍児童生徒の教育保障はないが、問題ないのだろうか。国際難民条約に批准しているにもかかわらず、毎年認定者数は先進国では極端に少ないのはなぜか。他方、日本政府が、外国人技能実習生、特定技能、日系 4 世、留学生、観光客等の受入拡大に積極的なのはなぜか。

報告者は、フランスの外国人と移民の子孫の教育保障および学業達成に関心を持ってきた。近年のフランス・ヨーロッパにおける NEET や ESL（高校中退者）対策を参考に、EU の教育政策で注目されているセカンドチャンス（学びなおし）としての教育について提示し、日本の教育機会確保法にそのヒントがあることを指摘した。

【講演者紹介】

九州大学教育学研究科中退。大分大学、文教大学を経て、2011 年より現職。専門は比較国際教育、移民研究。近年の主な著作は『フランスの社会階層と進路選択』勁草書房（2018 年）、『岐路に立つ移民教育』ナカニシヤ出版（2016 年）、『教育の大衆化は何をもたらしたか』勁草書房（2016 年）、『排外主義を問いなおす』勁草書房（2015 年）、『学校選択のパラドックス』勁草書房（2012 年）、Liberté, égalité, individualité, CNRS（2008）など。

○第 25 回人間科学セミナー

『日本における今後の高等教育政策について』

講 演 者：石橋 晶 文部科学省・高等教育局企画官

日 時：2018 年 10 月 11 日（木）16：40～18：10

場 所：本館 5 階 キャノピーホール

参加者数：97 名

【概 要】

本講演では 10 月 5 日開催の中央教育審議会総会で大筋了承された「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申（案）」に基づき、高等教育政策の方向性と国立大学改革の現在について説明がなされた。

同答申（案）で想定される 2040 年の日本社会は、SDGs、少子高齢化、Society5.0、グローバル化、地方創生などの言葉で表現されており、その中で高等教育は予測不能な時代を生きる人材の育成、そして新たな知を基盤としたイノベーションと地域の発展の具現化を通じ、社会変革の担い手となることが期待されている。高等教育に求められている各種改革、例えば教育の質の保証と情報公開、ガバナンス改革、規模と配置の適正化、コストの可視化などは、すべてこれら目標を実現するための方策である。大学を含めた高等教育の改革への要請は、社会的な期待の大きさからますます強くなるであろうことが示された。

以上の講演を受け、フロアからはリカレント教育、学習者のキャリア、博士人材の問題などについて質問が寄せられ、意見交換がなされた。なお、本セミナーは、高度副プログラム「大学マネジメント力養成・向上プログラム」が提供する「高等教育論特講Ⅱ」（担当：齊藤貴浩、川端亮）の一つの講義として提供された。

【講演者紹介】

石橋 晶 文部科学省・高等教育局企画官（併）高等教育企画課高等教育政策室長

略歴：平成 12 年入省。WTO 貿易交渉、教育委員会制度、理数教育推進、大学振興等の業務に携わる。兵庫県教育委員会への出向を経て、平成 27 年より再び高等局において国立大学法人の支援を担当、現在は高等教育局企画官（併）高等教育企画課高等教育政策室長として、高等教育政策全般を担当している。

○第 26 回人間科学セミナー
『学習環境デザインの現在』

講演者：西森 年寿 教授（教育学系 臨床教育学講座 教育工学研究分野）

日時：2018 年 11 月 8 日（木）15：00～16：30

場所：人間科学研究科 北館 2 F ラーニングcommons

参加者数：18 名

【概 要】

教育工学は、教育の効果あるいは効率を高めるためのさまざまな技術を、開発し、体系化する学を目指している。この分野において、特に、学習者を中心に据えた授業や教材の開発研究は、学習環境のデザイン研究と呼ばれる。この問いに対して、これまで、行動主義や認知主義の心理学、社会文化的アプローチと呼ばれるような学習論に導かれながら、様々な学習環境のデザイン上の原則が見出されてきた。

今回のセミナーでは、講演者が現在学生とともに取り組んでいる子供向けのワークショップや、小学校における情報教育の授業のビデオなどの事例を参照しつつ、そのデザインの特徴を読み解くということを試みた。最後に、講演者が着目しているデザイン要素として「創造」の可能性について触れた。

質疑応答では、フィードバックの持つ教育効果について、小学校教師のコミュニケーション技能や、トークンシステムの是非などについて意見が交わされた。その他、創造性だけでなく、思考力・表現力等を重視する教育改革の今後などに話題が及んだ。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士（人間科学）。メディア教育開発センター助手、東京大学客員准教授を経て、2010 年から大阪大学大学院人間科学研究科准教授。2018 年から教授。近年の論文は、「多人数授業におけるグループワークの運営を支援するグループウェアの開発と評価」『日本教育工学会論文誌』（2018）、「学習のためのコミュニティのデザイン」加藤浩・望月俊男編著『協調学習と CSCL』（2016）、「アクティブラーニングを支援する ICT ツール」永田敬・林一雅編著『アクティブラーニングのデザイン』（2016）など。

○第 27 回人間科学セミナー

『公教育システムの社会的意義を考える』

講 演 者：中澤 渉 教授（教育学系 教育環境学講座 教育社会学）

日 時：2018 年 12 月 6 日（木）15：00～16：30

場 所：人間科学研究科 北館 2 F ラーニングcommons

参加者数：27 名

【概 要】

OECD の統計に基づき、日本の公教育費が少ないこと（特に高等教育）、小中高については公費の割合は低くはないものの、トータルとしてかかっているコストは OECD 平均を下回っていること、そのことは支払うべきコストを払わず、教員などの過重な負担に依存している可能性を指摘した。その後、講演者が教育費に着目したきっかけについて、肥大化した学校への役割期待という問題と絡めながら説明し、今のような個人負担に大きく依存する構造となった歴史的経緯、その背景にある日本人の教育問題に対する意識調査の分析結果を提示した。その結果、日本人は一般的に、教育をプライベートの領域の問題として捉えがちで、教育に重きを置くか否かという価値観自体が階層によって異なっており、「教育＝公の問題」として捉えることが難しいという厳しい状況にあると結論付けた。

その後の質疑応答では、現行の教育改革の妥当性や問題点、教育費無償化を実施した場合に生じうる問題点、OECD の統計の解釈、社会のエリート養成のあり方や、教育と職業の関連性など、幅広い観点から議論がなされた。

【講演者紹介】

慶應義塾大学文学部卒業。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。博士（教育学・東京大学）。東洋大学社会学部准教授、大阪大学大学院人間科学研究科准教授などを経て、2018 年 4 月より現職。主著は『日本の公教育－学力・コスト・民主主義』中央公論新社（2018）、『なぜ日本の公教育費は少ないのか－教育の公的役割を問いなおす』勁草書房（2014）（以上単著）、『教育と社会階層－ESSM 全国調査からみた学歴・学校・格差』東京大学出版会（2018）、『格差社会の中の高校生－家族・学校・進路選択』勁草書房（2015）（以上共編著）など

○第 28 回人間科学セミナー

『子供たちの可能性を開く教育・学校とは～日本の大学入試のため(だけ)の学校を超えて～』

講 演 者：日野田 直彦 武蔵野大学中学校・高等学校校長

日 時：2019 年 1 月 24 日（木）16：20～18：00

場 所：本館 5 階 キャノピーホール

参加者数：42 名

【概 要】

近い将来、半分の仕事が AI に取って代わられる。そして国際的には、日本の経済規模はインドネシアやナイジェリアに抜かれ、平均的な豊かさでも遜色なくなる。そんな時代を生きる子供たちは今、何を学ぶべきか。本講演はそのような問いかけからスタートした。

二つの学校での教育改革（自分は「改革」という言葉は嫌いで、先生方のやりたいことをやってもらった結果だと言われるが）についてご説明をいただき、アメリカの大学に行って大学教員や起業家とプログラムを持った話や、海外に行けない生徒のためにアメリカから学生に来てもらった話、予算折衝を行い、図書館を d school のように改修した話、英会話学校とのコラボレーションを実現した話などを紹介していただいた。これらの活動で、学生は使える英語力を自ら身につけるとともに、チャレンジ精神やチームビルディングなどの能力を身につけていく。その結果、大阪府内の他の進学校よりも高い英語資格試験の成績を生み、数多くの生徒が海外トップ大学に進学する道を獲得したとのことであった。

最後の 20 分ではグループ活動を実践し、いかに多くの飛行機を飛ばすことができるか、フロア全体でグループ活動に励んだ。このようなアクティブラーニングを含め、新しい学びを体験した新入生に私たちは何ができるのか、そして各教育段階において何が最適な教育・学習なのかを含め、あらためて高等教育の在り方を考える機会となった。なお、本セミナーは、高度副プログラム「大学マネジメント力養成・向上プログラム」が提供する「高等教育論特講Ⅱ」（担当：齊藤貴浩、川端亮）の一つの講義として提供された。

【講演者紹介】

日野田 直彦 武蔵野大学中学校・高等学校校長

略歴：2000 年に馬淵教室入社。2008 年奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校の立ち上げに携わる。2014 年、大阪府の公募等校長制度に応じ、大阪府立箕面高等学校の校長に着任。新たな教育プログラムの導入や海外大学への進学等で顕著な結果を出した。2018 年より武蔵野大学中学校・高等学校校長となり、新たな教育を展開している。

○第 29 回人間科学セミナー

『盗む、不倫する、妖術師になる

：フローレス島から自由意志について考える』～最終講義～

講 演 者：中川 敏 教授（基礎人間科学講座 文化人類学分野）

日 時：2019 年 3 月 16 日（土）14 時 30 分～16 時 30 分

場 所：人間科学部 本館 キャノピーホール（51 講義室）

参加者数：94 名



【概 要】

私は 1979 年以來 40 年間インドネシアのフローレス島に住むエンデと呼ばれる人々の間でフィールドワークをつづけてきました。エンデの人々につけてもらった渾名のうち、私が最も気に入っているのは「ベートロモツバ」という名前です。これは「落ち着かず、あっちへ行ったりこっちへ行ったりする」といった含みをもった言葉です。今回の講義では、じつは、「ベートロモツバ」という言葉の中に人類学のエッセンスがある、ということを示しました。人類学とは個別の文化、例えば、エンデの文化と日本の文化の間をあっちへ行ったりこっちへ行ったりする営為です。さらに言えば、人類学とは個別と普遍の間をあっちへ行ったりこっちへ行ったりする営為でもあるのです。

この講義ではエンデの儀礼の中で禁忌を犯した人をおそうと言われる天罰から議論を始めます。そこから哲学の自由意志の議論へとベートロモツバします。議論は、そこから日本のアニメにでてくる性格論議へと跳びます。議論はさらにもう一度エンデへとベートロモツバします。このようにあちこち飛び回りながら、自由意志の問題をこれまでの哲学より広いパースペクティブに基づいて議論する可能性を示しました。

最終講義には、人間科学研究科でお世話になってきた先生方・事務の方々、卒業生の方々、現在の学部生さん・院生さんたち、その他わたしと何らかのかかわりのあった方々がきてくれて、熱心に聞いてくださりました。とてもいい思い出になりました。主催された先生方、進行を担当された先生方・学生さんたちに感謝いたします。

【講演者紹介】

1978 年 3 月東京大学教養学部卒業、1984 年 3 月東京大学社会学研究科博士課程単位取得退学、1984 年 10 月京都大学東南アジア研究センター助手、1989 年大阪国際大学講師、1990 年 4 月オーストラリア国立大学 Ph.D. 取得、1997 年 4 月大阪大学助教授、1999 年 6 月大阪大学教授

専門は文化人類学。主な著書は『交換の民族誌：犬好きのための人類学入門』（1992 年、世界思想社）、『異文化の語り方：猫好きのための人類学入門』（1992 年、世界思想社）、『モノ語りのナショナリズム』（1997 年、金子書房）、『言語ゲームが世界を創る』（2008 年、世界思想社）

○第 30 回人間科学セミナー

『メタ認知の心理学—私がメタ認知を研究する理由—』～最終講義～

講 演 者：三宮 真智子 教授（教育学系 臨床教育学講座 教育コミュニケーション学分野）

日 時：2019 年 3 月 16 日（土）15：00～16：30

場 所：人間科学研究科 東館 2 F ユメヌホール（207 講義室）

参加者数：92 名



【概 要】

私は人間科学部 3 期生として入学し、博士前期・後期課程では「文章処理における呈示様式の効果（モダリティ効果）」の実験研究に携わっていました。同テーマで博士号を取得した後、少し研究の幅を広げて、「コミュニケーションと思考・学習」をテーマとした実験研究を行ってきました。そうした中で、1980 年代に「メタ認知」という概念に出会い、「自分の探していたものは、これだ！」と感じたのです。以来、30 年以上に渡り、さまざまな角度からメタ認知を研究してきました。メタ認知とは、私たちの認知を認知の対象として客観的にとらえることを意味する概念です。これは、実験のテーマとしても非常に興味深いものですが、とりわけその実用性、実践性に魅力があると考えられます。というのも、メタ認知を働かせることにより、学び方や教え方、判断・意思決定、対人関係、コミュニケーションなど、大きく言えば生き方そのものをも改善することができるからです。

この最終講義では、私自身の個人史をふり振り返りながら、これまでの研究の足跡をたどってみました。当日は、土曜日であるにもかかわらず多くの方々にご出席いただき、感謝しております。

【講演者紹介】

1978 年 3 月大阪大学人間科学部卒業、1983 年大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得満期退学、日本学術振興会奨励研究員を経て 1984 年鳴門教育大学助手、1988 年同大学講師、1990 年助教授、1998 年教授。2009 年大阪大学大学院 人間科学研究科教授。学術博士（1985 年 大阪大学）。

専門は、認知心理学、教育心理学、教育工学。特に、コミュニケーションと思考・学習におけるメタ認知を研究している。主な編著書に、『メタ認知』、『メタ認知で＜学ぶ力＞を高める』、『考える心のしくみ』（以上、北大路書房）、『教育心理学』（学文社）、『誤解の心理学』（ナカニシヤ出版）などがある。

2 ランチトーク

○第23回 ランチトーク：クリエイションとことば

講演者：得能 想平（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士後期課程3年）

日時：5月10日（木）12:00～14:00

場所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：10名

【概要】

2018年度初回となった今回は得能が話題提供を行った。講演者の目的は、自身の研究対象である二〇世紀フランス哲学研究で得た知見をより一般的に近づきやすい仕方で表現することだった。講演者は「クリエイションとことば」というテーマを通じてこのことを挑戦した。

話は大きく二つの部分からなっていた。第一に現代社会を「クリエイション」、つまり創作活動の観点からみる重要性を知ってもらうことが目的であった。芸術制作、アカデミックな活動、営利活動などが持つ共通の側面として、「クリエイション」に注目することで、従来異質だと思われていた活動を比較することが可能になる。さらにこのような注目は、多様なライフスタイルにおいて生活する現代の人々の共通の課題を導き出し、社会的な一体感を生み出すことも可能にする視点でもある。参加者同士それぞれの視点からこのクリエイションにおける課題について発言や議論があり、講演者にとっても有意義なフィードバックが得られた。

第二の目的は「クリエイション」における「ことば」の重要性を知ってもらうことであった。講演者は、創作された作品を、実際にそれを体験することなしに、興味を持ってもらう必要がある「広告・広報」の問題を例として、「クリエイション」と関連する「ことば」のあり方を提題した。しかし、参加者はそれぞれの「クリエイション」のなかで異なる課題を抱えており、議論が散漫になってしまったように思われる。時間が限られていることもあり、テーマを一つにして発表してもよかったという反省が残った。

○第24回 ランチトーク：海外国際学会で研究発表をしてみよう

講演者：織田 和明（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士後期課程3年）

司会者：小林 勇輝（人間行動学講座 基礎心理学研究分野 博士後期課程2年）

日時：5月22日（火）12:00～12:55

場所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：10名

【概 要】

本企画は織田が話題提供者となり、海外で開催される国際学会で研究発表をこれから行おうとする学生を主な対象として、第 70 回教育改革推進室プレ FD 研修を兼ねて開催された。小林の司会進行の下、孫先生による教育改革推進室による大学院学生国際学会海外派遣支援金の説明、織田の実体験を踏まえたプレゼンテーション、そして参加者全員でのディスカッションが行われた。

これから初めての国際学会で発表を控えている博士前期課程 1 年生の学生たちから博士後期課程の国際学会での研究発表経験が豊富な学生まで、様々な研究分野から多くの学生が参加した。海外国際学会での研究発表についての様々な疑問や不安、それぞれの研究分野による学会のスタイルの違い、学会の規模や性格にあわせた研究発表の戦略の立て方などをめぐって、それぞれの経験を活かしながら活発にディスカッションが行われた。海外国際学会での研究発表について博士前期課程から後期課程までの様々な分野の出席者と話し合うことによって、今後の研究発表について各自考えを深めることができたと思われる。参加者の研究への意欲を湧き立たせる非常に有意義なランチトークであった。



○第 25 回 ランチトーク： 視知覚研究と、社会

講 演 者：小林 勇輝（人間行動学講座 基礎心理学研究分野 博士後期課程 2 年）

日 時：7 月 3 日（火）12：00～13：00

場 所：インターナショナルカフェ（本館 1 階）

参加者数：20 名

【概 要】

第 25 回ランチトークの前半では、講演者の研究分野である「明るさの知覚」についての説明と、講演者の具体的な研究内容の紹介が行われた。人間が物体表面の白黒をなぜ知覚できてしまうのかという疑問が視知覚の研究において重要なトピックの一つであり、この大きな問題の解決に取り組むのが明るさ知覚研究であるということが話されたのち、講演者の行った面の向きの研究、顔肌の明るさの研究が紹介された。研究紹介の時点では学部生も含めた約 20 名程度がインターナショナルカフェに集まり、ランチを囲みながら話に興味を示していた。

後半では、上記のような「基礎研究」がどのようにして社会に役立つことができるのかというテーマについてディスカッションを行った。基礎研究であっても、様々な場面において「その研究はどう役に立つのか」という問いを投げかけられることがある。基礎研究を行う者は往々にしてこの問いの答えに窮するものであるが、この問いに対してどのように答えて

いるか、どのように答えるべきなのかということについて参加者のそれぞれが意見を述べた。最終的には、そもそも「社会に役立つ」とは何かということについて考え、「研究を面白いと思ってもらうことも一つの社会貢献である」など、より広義の役立ち方が提案された。



○第 26 回 ランチトーク： 現場経験と研究：青年海外協力隊編

講 演 者：ユースフ 桂 悠介（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士前期期課程 3 年）

日 時：7 月 17 日（火）12：00～13：00

場 所：インターナショナルカフェ（本館 1 階）

参加者数：13 名

【概 要】

第 26 回ランチトークでは、まず青年海外協力隊の概要について紹介がなされた。その後、講演者が撮影した映像を用いながら、協力隊時代や赴任後の経験が語られた。具体的には、現地で触れた「ジン」という不可視の存在が、イスラームのクルアーンに根拠づけられることへの実感や、その実感が放射性物質と科学の関係と平行だと捉えられたという、再帰的な視点への言及があった。実際に協力隊に応募経験のある学生の参加もあり、後半は現地での生活や、講演内容に関する詳細についての質疑がなされた。

キャリアパスの一つとして、協力隊の現場での経験を研究として深める、というのは一つのパターンであるが、講演者の場合は、現場での農業実践から農業研究へ、といった典型的なものではなく、現地の人々と日本で培った価値観・前提のずれを主題とする人類学的な関心に向かっていた。

講演と質疑を通して、協力隊のような長期かつ理論的言説を前提としない現場経験は、単に現地に詳しくなるだけでなく、人類学者の松田素二が指摘した、初期アフリカニストの「生活の構え」の共有による「実感を通じた通交」に近いものをもたらし、学的言説を批判的に捉え直す契機になるのではないか、ということが示唆された。

今後もランチトーク企画で、様々な現場経験と研究の関係を探求することで、多様な研究のあり方や、研究すること自体への様々視座が得られるのではないかと感じられる回であった。



○第 27 回 ランチトーク：映画と芸術療法～監督ルネ・ラルーとラ・ボルド病院における実践～

講演者：香川 祐葵（人間科学部 研究生）

司会者：織田 和明（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士後期課程 3 年）

日時：11 月 19 日（月）12：00～13：00

場所：インターナショナルカフェ（本館 1 階）

参加者数：17 名

【概要】

本企画は、香川が話題提供者となり、映画という観点からラ・ボルド病院での精神病治療を考察する目的で開催された。織田の司会進行のもと、香川による映画の背景説明、ルネ・ラルーの短編作品の上映、そして参加者のディスカッションが行われた。ルネ・ラルーは世界的に有名なフランスのアニメーション映画監督であり、特に後年の作品は宮崎駿をはじめとする多くの映画監督に影響を与えたといわれている。しかし、注目すべきはラルーの映画製作のきっかけが、彼が研修医として訪れたラ・ボルド病院（「制度的精神療法」という特殊な治療法を実践していた精神病院）で行われた患者と共同の映画製作だったということである。彼の独特の作風は、ここでの活動の影響を受けていると思われる。今回は、世界的にも有名なラルーの短編『かたつむり』、そしてラ・ボルド病院で患者と共に作製した短編『猿の歯』の上映をした。特に『猿の歯』は企画・作製すべてにおいて精神病患者が行っているもので、ラルーが「分裂症の映画」と呼ぶものを知る上で重要だと考えられる。実際の映像を観ることで、ラ・ボルド病院の活動の一端に触れられたほか、ディスカッションでは映画の細部に注目した意見から“分裂症と創造性”のテーマにも踏みこむことができ、非常に有意義なランチトークであった。



○第一回海外派遣報告会 (English Skill-up Session)

講演者：Justin SANDERS (教育環境学講座 生涯教育学分野 博士後期課程 3 年)

陳 逸璇 (グローバル共生学講座 地域創生論分野 博士後期課程 1 年)

日時：11 月 26 日 (月) 12 : 10 ~ 13 : 00

場所：インターナショナルカフェ (本館 1 階)

参加者数：17 名

【講演者】

Justin SANDERS

【発表タイトル】

INTERNATIONAL PARTNERSHIP STRATEGIES AND PRACTICES AT 4 CASE STUDY GLOBAL RESEARCH UNIVERSITIES IN SINGAPORE AND JAPAN

【概要】

As internationalization has become firmly embedded in the higher education sector, universities are learning that in order to compete, they must collaborate. International partnerships facilitate the exchange of scholars and students, research collaboration, and the ability of universities to develop new programs and offerings to students. As such, partnerships have become essential to not just internationalization efforts, but any institutional ambitions towards "world-class status". This presentation will outline the process of international partnership development at four national comprehensive research universities in two national contexts, Singapore and Japan. By using a comparative perspective, we can highlight how both national and institutional factors can affect the approach to partnerships. Beginning with an overview of the nature and extent of partnerships at each university, the presentation will discuss the rationales and strategies employed by each institution in developing, managing and leveraging international partnerships. Data for the study comes from an extensive document review of material published by each university including websites, strategic plans, annual reviews, brochures and so on. In addition, semi-structured interviews were conducted with faculty and staff leadership at each university to gain greater insight into the rationale behind particular approaches. By providing such case study analysis, this study hopes to inform other higher education institutions in their own pursuit of mutually beneficial international partnerships.

【講演者】

陳 逸璇

【発表タイトル】

Disaster preparedness in the ageing society: Ten years on from the 2008 Sichuan Earthquake

【概 要】

This paper will review how Chinese society has responded and evolved in terms of disaster preparedness following the series of earthquakes in Sichuan: the 2008 Sichuan Earthquake, 2013 Lushan Earthquake in Sichuan, and most recently, the 2017 Jiuzhaigou Earthquake in August. This paper addresses two focus: disaster education and disaster tourism, in the context of global trends occurring concurrently, especially in the Pacific Rim Region: population ageing and disasters.

Following literature review mainly from Japan and China, we carried out fieldwork in Sichuan and Beijing, China. The first author, native of Sichuan, interned at NPO working on disaster education in Beijing and Sichuan, and conducted participant observation and interviews at schools in Sichuan. The second author conducted field work in Sichuan and other disaster tourism destinations. We all have repeatedly visited Sichuan and the 10th anniversary of the 2008 Sichuan Earthquake.

Results of fieldwork showed disaster education and disaster tourism is an important factor to take into consideration for post-disaster reconstruction and prepare for the next events. The interview showed clear respondent concerns about disaster preparedness and risk factors for disaster vulnerability as well as the need to work on the sustainable disaster tourism other than building disaster museums.

○第二回海外派遣報告会 (English Skill-up Session)

講 演 者：Gundsambuu Sainbayar (Kyosei Studies, Critical Studies in Transformative Education, 博士後期課程 2 年)

佐々木 小巻 (人間行動学系 社会心理学分野 博士前期課程 1 年)

日 時：3 月 12 日 (火) 12：10～13：00

場 所：インターナショナルカフェ (本館 1 階)

参加者数：7 名

【講演者】

Gundsambuu Sainbayar

【発表タイトル】

Internationalization of Higher Education and English Medium Instruction in Japan, South Korea, and Mongolia: Case studies of six private universities

【概 要】

In the competitive international higher education market, many countries in the Asia-Pacific region are striving to internationalize their higher education institutions through a wide variety of strategies and initiatives. Numerous factors influence this phenomenon. One of the growing global phenomena is the introduction of English-medium instruction (EMI) at universities. This study aims to explore the implementation of policies for EMI at six private universities in Japan, South Korea, and Mongolia and to investigate their rationales by applying the model of Top-down, bottom-up, and sideways. As EMI is one trend in the internationalization of higher education across non-Anglophone countries, higher education institutions in these three countries are introducing courses and degree programs in English in order to become more competitive in the regional or international higher education market. The data for this study consists of an extensive document of materials, and semi-structured interviews with 47 faculty members and administrators. The rationales for introduction and implementation of courses and programs in English differ in terms of their designs, characteristics, and national contexts. In Japan, the government's top-down policy plays an important role in EMI development and implementation. The cases in South Korea display many similarities in comparison to Japan. However, studies on EMI in Korean higher education are few. In contrast to Japan and South Korea, EMI is a new phenomenon in Mongolia.

【講演者】

佐々木 小巻

【発表タイトル】

The effect of unusual first-names in impression formation in Japan

【概要】

Recently, more parents named their children unusual names in Japan. Some previous studies reported many people had negative impressions of these names. For example, we often see the bashing to the both defendants and victims who have these names in news program and SNS. There have been also previous studies that first-names affect impression and criminal judgement (Bienlen et al., 2018). However, there are a few empirical studies about the impressions of first-names in Japan.

The purpose of this study was investigating the effect of unusual first-names in impression formation in Japan using criminal scenarios. I made two scenarios for this study. One had usual first-name defendant and the other was unusual first-name defendant. The hypothesis was the people had worse impression of the unusual first-name defendant than usual first-name defendant. I did student t-test to reveal the effect of the first-names. The dependent variables were three: negative impression of the defendant, the cause of this crime, and serve time for defendant. In the results of t-test, I did no significant difference.

The results of this study contrasted with many prior researches in other countries outside Japan. A possible explanation for this difference from previous studies might be that both names I used were Japanese names. Many previous studies used usual first-names as native first-names and unusual first-names as foreigner's name.

4 冊子『私の一冊』の作成と配付

－人間科学部 1 回生の必修講義「人間科学概論」のテキストとして－

人間科学部 1 回生の必修講義「人間科学概論」は 2018 年度で開講 3 年目を迎えた。世話役教員が交替したこともあり、今後も持続可能な授業になるよう、15 回の授業全体の構成を検討した。新しい授業構成は次の通りである。

●「人間科学概論」授業構成●

第 1 回

イントロダクション（世話役教員）：授業概要を説明するとともに、「人間科学」に関する受講者の前理解を明確にするためにグループ・ディスカッションを行う。

第 2～6 回

行動学／社会・人間学／教育学／共生学の視点から見た「〇〇する」こと（授業担当教員・世話役教員）：人間科学叢書シリーズおよび『人間科学叢書 〇〇する』各巻の編集意図を説明するとともに、この著書に掲載されている論文の目的・内容・意義について編著者と異分野の研究者である授業担当教員、世話役教員が学際的に議論する。また、講義を振り返り、学生どうしでグループ・ディスカッションも行う。

第 7～8 回

研究倫理（人間科学研究科の研究倫理委員・世話役教員）：今後、レポートを書いたり、研究を実施し、成果を発表したりする際に倫理的に留意すべき点について説明する。

第 9～11 回

人間科学の過去・現在・未来（世話役教員）：人間科学の学問的系譜について概説するとともに、今後の展開可能性について学際的に議論する。

第 12 回

大学院生の語る「私の人間科学」（大学院生・世話役教員）：大学院生が自身の研究活動を通して形づくってきた「私の人間科学」を 1 年生に伝える。

第 13～14 回

『私の 1 冊』を紹介する（世話役教員）：『私の 1 冊』のなかから受講生が選んだ本の内容と自分の意見や感想を簡単なレジュメにまとめ、グループ・ディスカッションを行う。その後、1200 字程度の書評を書く。

第 15 回

まとめ

第 13～14 回の授業のなかでテキストとして使用するため、2018 年度も『私の一冊』を編集、刊行し、1 回生に配布した。『私の一冊』とは、初代編集者の中道正之教授の言をお借りするなら、「人間科学研究科教員に、1 年生に読んでほしい本 1 冊とその本の内容、なぜ読んでほしいのかなどを 1000 字ほどで書いていただいた」ご原稿と、「人間科学研究科教員自身の著書を紹介していただく」いたご原稿とを所収した小冊子である。本年度は、退職した先生方のご原稿を外し、新任の先生方のご原稿を挿入するなどの編集を加えた。

第 13～14 回の授業で実施した内容は、次の通りである。まず、受講生は事前に『私の一冊』で紹介されている本を 1 冊、選んで読み、第 13 回の授業当日、4～5 名のグループのメンバーに内容と自分の感想とを伝える。この時、他のメンバーからの質問や意見によって、受講生は、本の内容をより分かりやすく紹介するヒントを得たり、自分の感想や意見を相対化したりする。このグループ討議を踏まえて、第 14 回の授業までに、受講生はそれぞれ書評を執筆する。第 14 回の授業では、それぞれ持ち寄った書評を互いに批評し合う。この批評に基づいて、第 15 回の授業時に、書評の最終原稿を最終レポートとして提出する。

2019 年度も「人間科学概論」のなかで『私の一冊』を同じようにテキストとして使用する予定である。

(文責 岡部 美香)

5 小・中・高大連携

未来共創センターで対応した小学校・中学校・高等学校での出張授業、高校生の研究室訪問等は延べ 17 校であった。出張授業、研究室訪問等では、教員が主に対応したが、同時に、学部生、大学院生も参加した。

参加した学生たちには、教員の模擬授業や研究紹介の合間に、学生生活や研究内容を高校生や小中学生にわかりやすく伝えることを求めた。学生からは、「高校で講義させて頂く機会には中々無いため、とても貴重な経験をさせていただきありがたかった」などの報告を得た。このことは、「高大連携」を大学から高校等への一方向の情報提供とするだけでなく、学生教育の場ととらえることが可能であることを示唆している。

なお、未来共創センターが関わった下記の「高大連携」一覧以外にも、人間科学研究科教員が個別に高校等での出張授業、研究室訪問に対応していることも付記する。

●17 回実施（センターに連絡があったもの）

- ・兵庫県立小野高校出張授業
(中井准教授：大阪大学大学院人間科学研究科・院生 1 名) (6 月 14 日)
- ・関西大倉高校出張授業 (中道教授・学部生 1 名) (6 月 14 日)
- ・京都市立勤修中学校 1 年生出張授業
(孫講師・院生 1 名・学部生 2 名) (7 月 12 日)
- ・岡山県立岡山一宮高校 1 年生 (参加者：80 名) サルの観察実習
(中道教授) (7 月 30 日)
- ・大阪教育大学附属天王寺中学校学生 1 名研究室訪問
(澤村教授) (8 月 6 日)
- ・仁川学院中学校模擬授業 (中野准教授・後藤助教) (8 月 28 日)
- ・大阪府立千里高校出張授業 (山田講師・院生 1 名) (10 月 9 日)
- ・京都市立勤修中学校出張授業 (孫講師・院生 2 名) (10 月 26 日)
- ・関西学院千里高校出張授業 (渥美教授) (10 月 29 日)
- ・箕面市立豊川南小学校出張授業 (孫講師・院生 3 名) (10 月 31 日)
- ・大阪府立高津高校模擬授業 (澤村教授) (11 月 12 日)
- ・大阪府立高津高校模擬授業 (狭間特任研究員) (11 月 13 日)
- ・関西大倉高校 1 年生出張授業 (中道教授) (11 月 24 日)
- ・正智深谷高校出張授業 (稲場教授) (12 月 7 日)
- ・岡山県立勝山高校サルの行動観察実習 (中道教授) (12 月 29 日)
- ・箕面市立豊川南小学校出張授業 (孫講師・院生 2 名) (1 月 30 日)
- ・兵庫県立三田祥雲館高等学校出張授業 (澤村教授) (2 月 6 日)

韓国との交流も含めた多角的な連携による出張授業

目 的

日本の小学校、大学、国際交流協会、韓国の大学との連携を通じた、国際理解教育、日本語教育実践を通して、教員、学生、団体職員との学び合いの機会を創出する。両国の小学生や大学生たちが、各々の地域の歴史や文化背景、言語を学びあうことを通して、学生たちが知識を深め、友情を育み、両国の多様な交流を促進する主体となっていくきっかけづくりをしたい。

連携先（担当者）

箕面市立豊川南小学校（伏屋江 美香教諭）

箕面市国際交流協会（職員：大野アンドレイア氏）

釜山外国大学日日本語創意融合学部（二色 博樹教授）

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター（孫 美幸講師）

実施概要

箕面市立豊川南小学校の国際交流クラブ（年8回実施）の出張授業のコーディネートは大野アンドレイア氏（箕面市国際交流協会）が担っていた。そのうち2回の出張授業の講師や担当を孫が担い、センターの学生たちとも一緒に授業を創った。テーマは、韓国の文化紹介や交流。その一環として、直接韓国釜山外国語大学の学生たちとメッセージの郵送を通じた交流を組み込んだ。釜山外国語大学では、日本語の授業の一環として二色教授が実施した。10月31日の授業では、釜山に暮らす大学生たちと日本の中学校でメッセージ交流を始めた経緯を話し、小学生たちが手紙の作文を書き始めた。1月30日の授業では、韓国語に親しみ、その後韓国から届いた手紙の返信をゆっくりと読む時間をもった。

実施日程

9月中旬に 釜山外国語大学より大学紹介等のメッセージが小学校に届く。

10月31日（水）孫と学生たちの授業（韓国のイメージ、メッセージ交流の説明、メッセージ作成）

11月上旬 子どもたちのメッセージ完成予定。韓国に郵送。

11月末までに 釜山外国大学の授業でメッセージの返信作成。12月～1月に日本に郵送。

1月30日（水）孫と学生たちの授業（メッセージ受け取り、韓国の文化体験とともに）



6 公開講座

◎ 第三回市民公開講座 「助ける」

【講 演】

『国際医療協力と人類学 ～マラリア対策の現場から～』

白川 千尋 教授（基礎人間科学講座 科学技術と文化研究分野／グローバル共生学講座
国際協力学研究分野／未来共創センター）

『海外の被災地における NGO の復興支援 ～KOBE から世界へ～』

吉椿 雅道 氏（CODE 海外災害援助市民センター事務局長）

コーディネーター：渥美 公秀 教授（未来共生学講座 共生行動論研究分野）

日 時：11 月 17 日（土）13：30～

場 所：本館 51 講義室（キャノピーホール）

参加者数：51 名

【概 要】

○国際医療協力と人類学 ～マラリア対策の現場から～

白川 千尋 教授（基礎人間科学講座 科学技術と文化研究分野／グローバル共生学講座 国際協力学研究分野／未来共創センター）

医療をめぐる国際的な支援活動である国際医療協力は、一見すると主に医学系分野の守備範囲である一方、人類学／文化人類学は無縁のように見える。しかし、実際にはそうではない。では、人類学は国際医療協力にどのようにかかわっているのか、かかわることができるのか。この点について、私がかかわったミャンマーのマラリア対策プロジェクトの例を取り上げながら、具体的に説明を行った。結論として、人類学はとりわけ協力相手の人々の積極的な参加に基づく「参加型」の協力活動において、人々に関係する社会・文化的な知見を協力者・支援者側に提供する役割を果たすとともに、人々の目線にそくして協力者・支援者の活動を捉え直し（相対化し）、軌道修正を施す役割も担い得ることを述べた。フロアーからは、上述のプロジェクトの詳細から、国際医療協力以外の分野に対する人類学の社会的・実践的貢献の可能性に至るまで、多岐にわたる質問やコメントが提示され、熱のこもった議論が繰り広げられた。

○海外の被災地における NGO の復興支援 ～KOBE から世界へ～

吉椿 雅道 氏（CODE 海外災害援助市民センター事務局長）

CODE は、阪神・淡路大震災の際に世界から支援をいただいた事がきっかけで KOBE の市民によって立ち上げられた。これまで 24 年間で世界 35 の国と地域で住宅再建や仕事創

りなどの救援活動を 61 回行ってきた。今回の公開講座「助ける」では、CODE が海外の被災地で支援をする際の考え方を「5W1H」を使って話した。支援から取りこぼされる地域や人たちの声を丁寧に聴き、信頼関係を築く。現地の人たち自身が技術や知恵を学び、復興の担い手になるような持続可能な方法をいつも模索している。白川先生の「支援者目線を捉え直す」という問いを自戒として、今後の支援活動を行っていきたい。

○茶 話 会

時 間：16：00～17：00

場 所：本館インターナショナルカフェ

参加者数：40 名

講演終了後、講演者、来場された方々、学生、スタッフと軽食を囲みながら歓談の場をもち、直接交流する機会をつくった。

【講演者紹介】

白川 千尋 教授

専門は文化人類学。呪術と科学の関係、国際協力と文化人類学の関係などに関する研究を行う一方、マラリア対策を中心とした国際医療協力の実践的活動にも従事してきた。著書に『南太平洋の伝統医療とむきあうーマラリア対策の現場から』など。

吉椿 雅道 氏

十代より中国武術と東洋医学を学ぶ傍ら、アジア、南米の先住民支援の NGO にかかわる。'95 年阪神・淡路大震災で足湯ボランティアを始める。'04 年より現 NGO のスタッフとして国内外の多くの被災地で活動する。'14 年より現職。

渥美 公秀 教授

1961 大阪府生まれ。大阪大学人間科学部卒業、大阪大学大学院人間科学研究科在学中にミシガン大学に留学し Ph.D.（社会心理学）取得。専門はグループ・ダイナミックス。阪神・淡路大震災で被災して以来、災害ボランティアに注目した現場研究を続けている。（認特）日本災害救援ボランティアネットワーク理事長。

7 第1回人間科学フロンティア公開講座

「最新データからみる階層と社会意識—共生社会の実現に向けて—」

【報 告】

『SSP2015の調査モード，CAPIについて』

小林 大祐（金沢大学 人間社会研究域 准教授）

『若者にとっての中流、中高年にとっての中流：世代で異なる日本社会イメージ』

金澤 悠介（立命館大学 産業社会学部 准教授）

『市民参加の活発化のカギとは？』

三谷 はるよ（龍谷大学 社会学部 講師）

『社会階層の脆弱性を分析する』

石田 淳（関西学院大学 社会学部 教授）

『コンサマトリーで読み解く現代の若者』

狭間 諒多朗（大阪大学大学院 人間科学研究科 特任研究員）

【討 論】

討 論 者：渥美 公秀（大阪大学大学院 人間科学研究科 教授）

稲場 圭信（大阪大学大学院 人間科学研究科 教授）

日 時：9月17日（月祝）14：00～

場 所：大阪大学 中之島センター 702 教室

参加者数：32 名

【概 要】

○SSP2015の調査モード，CAPIについて

小林 大祐（金沢大学 人間社会研究域 准教授）

今回のシンポジウムでの報告が主に依拠する社会調査データである SSP2015 は，CAPI という調査モードで実施されている。調査モードとは，調査票を用いた量的調査におけるデータ収集法のことであり、個別面接法、電話法、留置法、郵送法、集合法などが従来よく用いられてきた。近年、コンピュータ支援による調査モードの導入の動きが本格化し、SSP2015 も CAPI（Computer Assisted Personal Interviewing）と呼ばれる、調査員が調査対象者の自宅等を訪問し、コンピュータ・デバイスを用いて対面する調査対象者に質問

を行い、得られた回答を入力する方法を用いている。

本報告では、まず、どのような調査モードで調査を行うかが、得られるデータの質にとっても大きな影響を及ぼす場合があることを、調査モードの異なる調査との比較によって示し、それは SSP 調査のように人びとの様々な意識や態度を知ろうとするような調査においてより重要な意味を持つことを明らかにした。次に、SSP2015 で用いられた CAPI システムについて映像を用いて簡単に示した。最後に、ほぼ同時期に PAPI という調査モードで実施された SSM2015 調査と比較を行った上で、今回導入した CAPI 調査システムのメリット、デメリットについて理解を深め、以後の研究に役立てたいと考えている。

○若者にとっての中流、中高年にとっての中流：世代で異なる日本社会イメージ

金澤 悠介（立命館大学 産業社会学部 准教授）

日本社会のイメージが「総中流社会」から「格差社会」に変化したにもかかわらず、日本人の半数程度は自身を社会の中層に位置づけており、その傾向は 1985 年から 2015 年の 30 年間で大きく変化していない。かつて中意識は日本人の同質性を示すものとして扱われてきたが、現代社会において中意識を持つ人たちはかつての想定のとおり階層意識の面でも階層的地位の側面でも同質的な集団なのであろうか。

本報告では、階層帰属意識の中位カテゴリである「中の下」と答える人たちを主な対象として、現代において中意識をもつ人たちの階層意識や階層的地位の特徴を解明しようとした。そして、分析結果から浮かび上がってきたのは世代によって大きく意味合いが異なる中意識のありかたであった。

①中高年層（50－60 代）は親世代に比べ経済的水準が上昇したことで、中意識をもつようになっている。上昇移動を経験したことで日本社会の多くは「中層」であり、そうあるべきというイメージを持っているため、格差には否定的な態度をとる。

②若年層（20－30 代）では、親も本人も大卒以上のものが中意識をもつようになっている。親と同じ社会的地位を競争によって継承したと考えるがゆえに、格差については肯定的な態度をとる。

これらの分析結果から、現代社会における中意識の分断？の社会的あるいは政治的な含意を議論した。

○市民参加の活発化のカギとは？

三谷 はるよ（龍谷大学 社会学部 講師）

市民参加とは、「一般市民が政治や自治に関わりうる活動に参加すること」をさす。例えば、投票、市民運動、ボランティア活動などが挙げられる。少子高齢化、単身世帯の増加、災害の頻発化といったさまざまな課題を抱える現代社会において、市民参加の意義はますます高まっている。では、どうしたら市民参加は活発化するのだろうか？

社会学はこれまで、参加する人の①個人の特性と②地域の特性に注目してきた。この 2 点に関して、SSP 調査から次のことが明らかになった。

- ①高収入、高学歴、専門・管理職の人ほど市民活動に参加しやすい傾向がある。
- ②都市度の低い地域（市区町村）、第1次産業の従事者比率の高い地域、高齢化率の高い地域において、市民参加が活発になる。
- ①の結果から、労働市場の格差・不平等が、市民社会の格差・不平等につながっていることが示唆された。一方で②からは、より多くの課題を抱えた地域ほど、市民参加が活発化する側面があることもわかった。これは、より多くの住民が同じ問題関心を共有しやすいからだと考えられる。これらの研究結果を踏まえて、「市民参加の活発化のカギ」について議論を行った。

○社会階層の脆弱性を分析する

石田 淳（関西学院大学 社会学部 教授）

本報告の目的は、SSP2015 データを用いて、社会階層の潜在的な脆弱性を分析することによって、社会的ハザードマップの作成を目指す端緒とすることである。

具体的には、ある目的変数上で測定される、あるイベントの潜在的な効果を「ヴァルネラビリティ・スコア」と名付け、共変量によって分けられるサブグループごとにスコアを測定することで、潜在的な脆弱性を分析した。本報告では、目的変数として、主観的幸福感と世帯収入、イベントとして離死別と失業、共変量として性別・年代・学歴という不可逆的属性でありかつ階層的分断の基底となるカテゴリーを取り上げた。

その結果、以下のことがわかった。離死別を原因とするヴァルネラビリティについて、幸福感については男性・高齢・低中学歴層においてとくに高い潜在的ダメージが確認され、また、世帯収入については、女性・中年・高学歴層でとくに高くなっていた。次に、失業を原因とするヴァルネラビリティについては、幸福感・収入とも男性・若年もしくは中年・低中学歴に顕著な潜在的ダメージが認められた。さらに、幸福感に関しては女性・若年・高学歴にも潜在的に高い脆弱性が認められた。

○コンサマトリーで読み解く現代の若者

狭間 諒多朗（大阪大学大学院 人間科学研究科 特任研究員）

今の若者は、何かの目的に向かって頑張らず、「今、ここ」で仲間と楽しく過ごすことを大事にしているといわれている。このような態度のことを「コンサマトリー」という。本報告では、コンサマトリーな態度の中から将来のために努力するよりも今を大事にするという「現在志向」に注目し、現代の若者の姿を明らかにす。

分析の結果、次の3点が明らかとなった。

- ① 若者の現在志向はこの20年で強まっていない。
- ② 学歴の低い若者ほど現在志向が強いという学歴差がある。この学歴差は20年前にはない。
- ③ 学歴の低い若者でのみ、現在志向が強いほど階層帰属意識が高いという関連が存在する。一方で、これまでに指摘されてきた階層帰属意識を高める要因（結婚している、

世帯収入が多い) が効果を持っていない。

以上の結果から、将来を大事にするのか今を大事にするのかという行動原理が学歴によって異なっており、今の若者を一括りにすることはできないことがわかった。また、学歴の低い若者では今を大事にすることが階層帰属意識の上昇につながっており、階層の捉え方にも学歴差が生じている。

【報告者紹介】

小林大祐

1971 年生まれ。同志社大学大学院文学研究科博士課程後期修了。仁愛大学人間学部を経て、現在、金沢大学人間社会研究域人間科学系准教授。専門は社会意識論。社会調査法。

金澤 悠介

1980 年、島根県生まれ。東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学（博士（文学））。現在、立命館大学産業社会学部准教授。専門は計量社会意識論。大規模な社会調査データを分析することで、人々にとっての日本社会の見え方やその階層差について研究しています。

石田 淳

1976 年生まれ、京都府出身。現在、関西学院大学社会学部教授。専門は数理社会学。モデルベースの社会調査データ分析にも関心があります。

三谷 はるよ

1986 年、石川県生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。同大学院助教を経て、2015 年から龍谷大学社会学部専任講師。専門は福祉社会学。計量的手法を用いて、ボランティアやソーシャルサポートといった福祉現象を研究しています。

狭間 諒多朗

1989 年、大阪府生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。現在、大阪大学大学院人間科学研究科特任研究員。専門は計量若者論。若者の意識や行動、そしてその階層差について研究しています。

8 未来共創センター公開シンポジウム 第1回

「知と人のキュレーションで創る共生社会」

【開会挨拶】

川端 亮（大阪大学総長特命補佐、人間科学研究科長）

【理事挨拶】

小川 哲生（大阪大学理事、副学長）

【OOS 説明】

稲場 圭信（未来共創センターOOS 担当、人間科学研究科教授）

【取り組み事例紹介】

街づくり 上田 眞（パナソニックホームズ株式会社街づくり事業部分譲事業推進部長）

被災地復興 渥美 公秀（未来共創副センター長、人間科学研究科教授）

防災・見守り 幸田 栄長（一般社団法人全国自治会活動支援ネット理事長）

【パネルディスカッション 知と人のキュレーション】

コーディネーター 渥美 公秀（未来共創副センター長、人間科学研究科教授）

パネリスト 小田 祐士（岩手県九戸郡野田村・村長）

寺本 弘伸（日本災害救援ボランティアネットワーク常務理事）

石川 浩二（NTN 株式会社・執行役員）

栗本 英世（大阪大学副学長、人間科学研究科教授）

稲場 圭信（未来共創センターOOS 担当、人間科学研究科教授）

日 時：2019 年 1 月 17 日（木）16：00～

場 所：本館 51 講義室
（キャノピーホール）

参加者数：124 名



【概要：OOS 説明】

○ 稲場 圭信（未来共創センターOOS 担当、人間科学研究科教授）

社会には諸難題がある。一方で、世の中には様々な専門知や現場での知がある。しかし、調査データや科学技術があっても、社会課題を解決するためにその知を社会実装することは容易ではない。OOS で連携する防災見守り共同研究では、大阪大学の知的財産である防災アプリ「未来共生災害救援マップ」と全国自治会活動支援ネットの発案による独立電源通信網「みまもりロボくんⅢ」を活用して安心安全の社会を作るために、NTN 社やソフトバンク社などの企業と共同で取り組んでいる。OOS では、大学と企業や様々なパブリックセクターが連携して「共創」し、社会課題の解決にチャレンジしている。

【概要：取り組み事例紹介】

○ 上田 眞（パナソニックホームズ株式会社街づくり事業部分譲事業推進部長）

パナソニックホームズが大阪大学と共に進めているグローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクトについて紹介した。「多世代」「多様性」「知」を街づくりのコンセプトとし、「学び」「交流」「安心」を実践目標にプロジェクトを進めている。グローバルビレッジで暮らす人、訪れる人、働く人にとって価値ある街づくり、そして地域の皆さまに愛される街づくりを目指して、2020 年 10 月のまちびらきを予定している。

○ 幸田 栄長（一般社団法人全国自治会活動支援ネット理事長）

地域活動から生まれた“みまもりロボくん”構想が“IT を用いた防災・見守り・観光に関する仕組みづくりの共同研究”に参画するまでには 10 年余の紆余曲折があった。

その経験から“主体性ある地域コミュニティこそリスクに対応できる社会基盤”だと言える。地域を俯瞰できる人材があってこそ地域活動が継続し主体性ある地域コミュニティとなる。企業の CSR 視点も「まちづくり人材養成は未来への投資」にフォーカスし共感して頂ければありがたい。

【概要：パネルディスカッション】

○ 小田 祐士（岩手県野田村村長）

東日本大震災大津波から 8 年経過するが、今もなお支援いただいている多くの方々に感謝申し上げる。

大震災は村民や村職員の考え方に大きく影響した。村を訪れる阪大の学生やボランティアの方々とのふれあいは保守的だった人々の意識を変える良いきっかけになった。そして何より、支援いただいた方々との絆が深まりをみせ、これまで築いてきた繋がりが形となってきている。こうした繋がりを大切に住みよい魅力ある村づくりを進めていきたい。

○ 寺本 弘伸（日本災害救援ボランティアネットワーク常務理事）

昨年のお阪北部地震では、高槻市や吹田市で活動を行った。避難所になった箕面市の小
学校では阪大の留学生が多く、避難所閉鎖に伴い阪大内に避難所が開設されたが、この大
学の動きは素晴らしいと思った。今後は、災害に備え日頃からのコミュニティづくりを目
的に、この協定を基に吹田市内で「学生出前カフェ」を計画中。夢は 2025 年の万博に「健
康と防災(災害)」をテーマに、協定団体・企業と連携してブース出展を検討してみたい。

【報告者紹介】

上田 眞（パナソニックホームズ株式会社街づくり事業部分譲事業推進部長）

渥美 公秀（未来共創副センター長、人間科学研究科教授）

幸田 栄長（一般社団法人全国自治会活動支援ネット理事長）

渥美 公秀（未来共創副センター長、人間科学研究科教授）

小田 祐士（岩手県野田村長）

寺本 弘伸（認定 NPO 法人 日本災害救援ボランティアネットワーク 常務理事）

石川 浩二（NTN 株式会社・執行役員）

栗本 英世（大阪大学副学長、人間科学研究科教授）

稲場 圭信（未来共創センターOOS 担当、人間科学研究科教授）

まなびのカフェ〈怒り〉との上手な付き合い方、教えます

○第1回 夫源病予防のためには：熟年離婚の遠因となる産後クライシス

講演者：石蔵 文信

日時：2018年5月15日（火）10：30～12：00

場所：應典院 気づきの広場

参加者数：30名

【概要】

夫婦の危機が訪れるのは案外早く、結婚5年目以内が多いと言われています。この時期は結婚して幸せ、子供ができて幸せな時期ですが、実は子育て期間に夫婦間に決定的な溝が生まれ、シングルマザーとなるケースが増えています。妻が何とか耐え忍んでも、夫の上から目線の言動が続くと熟年期に体調を崩して夫源病を発症し、熟年離婚につながります。今回はその解説と対応法をお話いたします。

【講演者紹介】

大阪大学大学院 人間科学研究科附属未来共創センター招へい教授。
循環器科医師。男性更年期外来を大阪市内で開設。
夫の何気ない行動や言葉が強いストレスになり、妻の身体に更年期障害のような変調を引き起こす病気を「夫源病」と名付ける。テレビ、新聞、雑誌など様々なメディアで活躍中。



○それ私にも効くの？の科学：健康情報とのつきあい方

講演者：木村 友美

日時：2018年6月7日（木）10：30～12：00

場所：生涯学習センター（中央図書館北隣）405室

参加者数：19名

【概 要】

「体にいい」とはどういうことでしょうか？食品の健康効果を信じますか？現代社会には食や健康に関する情報があふれており、健康情報を読み解く力＝ヘルスリテラシーが求められます。EBM*の重要性が高まるなか、幸せの国ブータンやヒマラヤ地域ではシャーマンによる治療が実際に人びとを癒しているという現実もあります。EBM からシャーマニズムまで、様々な事例をみながら健康情報とのつきあい方について一緒に考えてみましょう。

*EBM, Evidence Based Medicine 科学的根拠にもとづいた医療

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科助教。

奈良女子大学食物栄養学科卒業後、京都大学医学研究科修了（社会健康医学博士）。WHO 神戸センター、京都大学東南アジア研究所研究員を経て現職。食と健康長寿の調査のため訪れた国は 10 ヶ国以上にのぼり、自身の研究スタイルを「フィールド栄養学」と称す。



○第 2 回 怒りは厄介なものなのか？：「怒りの氷山」の下にあるもの

講演者：藤岡 淳子

日時：2018 年 6 月 12 日（火）10：30～12：00

場所：應典院 気づきの広場

参加者数：42 名

【概 要】

みなさんは「怒り」は厄介なものと思いませんか？そのように思われがちな「怒り」という感情ですが、実は私たちが心身ともに健康な生活を送る上でも、とても重要な機能を果たしています。怒りを始めとする感情の機能について考えた後で、自身の怒りや笑顔の奥にあるかもしれない、様々な感情に気づき、そして、表現していくことの重要性について、ワークを通して体験します。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科教授。

博士（人間科学）。上智大学大学院修了後、少年鑑別所、少年院、刑務所等において 20 年間非行少年、受刑者の心理査定と教育に携わる。2002 年より現職。また、一般社団法人「もふもふネット」において性犯罪の加害と被害の治療にあたっている。



○第3回 学校・園と周辺住民とのトラブル：「子どもの声は騒音かもしれない」

講演者：小野田 正利

日時：2018年6月26日（火）10：30～12：00

場所：應典院 気づきの広場

参加者数：23名

【概要】

子どものふるまいや喚声、砂ぼこり、エアコン室外機の騒音、植栽……。学校や園に対する近隣住民からの苦情やクレームが増え続けています。公共的施設だから、昔からあったから、という理屈が通らなくなった現在、紛争やトラブルを少しでも緩和しながら共存していくためには何が重要でしょうか？紛争やトラブルを少しでも緩和しながら、双方が折り合いをつけていくためには何が必要かを考えます。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科教授。

名古屋大学法学部、教育学研究科修了（教育学博士）。「けったいやなぁ」と思われる「学校と保護者そして近隣住民とのトラブル研究」を中心に「学校保護者関係研究会」を組織し20年が経った。講演風景は教育界の綾小路きみまろと評されている。



○第4回 あなたも加害者になってしまう？：インターネット上での攻撃行動の心理学

講演者：寺口 司

日時：2018年7月10日（火）10：30～12：00

場所：應典院 気づきの広場

参加者数：24名

【概要】

近年、インターネット上でのトラブルが多く発生しています。これらは他人事のお話でしょうか？実は、これらの原因の一つは誰しもが持っている「誰かを傷つけようとする心理」

です。場合によっては、皆さんも当事者にも加害者にもなりえるのです。今回は「炎上」・「ネットいじめ」の二つをテーマに挙げながら、これからのインターネット社会での生き方を考えたいと思います。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科助教。

ヒーローものの番組が好きで、「なぜ仮面ライダーはカッコいいのだろう？」という問いが研究のきっかけに。実験的手法やインターネット上での調査等から、「なぜ人を傷つける行動を称賛することがあるのか」について研究を行っています。



○日米比較からみた子育てアプローチ

講演者：安元 佐織

日時：2018年9月9日（日）14：00～16：00

場所：comm cafe（箕面市立多文化交流センター内）

参加者数：29名

【概要】

子育て中の日本とアメリカのお父さん、お母さんに、「お子さんには、どんな人に育てて欲しいですか？」という質問をしました。日米のお父さん、お母さんの答えには、どのような類似点や相違点があるのでしょうか？また、どのような要因が類似点や相違点を作り出しているのでしょうか？事例を紹介しながら、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター国際交流室講師。

専門は社会学で、特に親子関係や夫婦関係などに関する研究に励んでいます。最近では、百寿者の親とその子どもにお話を聞きながら、超高齢期の親子関係について考えています。



「子どもを〈助ける〉いのちを〈支える〉」

○第1回 子育てを支援する人たち ～西成区で子育て支援をされているみなさんを中心に～

講演者：村上 靖彦

日時：2018年10月31日（水）10：30～12：00

場所：應典院 気づきの広場

参加者数：27名

【概要】

大阪市西成区はかつての日雇い労働者の町として知られていますが、実は子育てを助けるさまざまな支援者が活躍する地域です。にしなり☆こども食堂、わかくさ保育園、MY TREEペアレンツプログラム、訪問事業をする助産師さんといった人たちに注目して、困難な状況にある親子に伴走する人たちがもっている実践知を考えていきます。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科教授。Ph.D.（基礎精神病理学・精神分析学）

もともと哲学の研究者ですが、現在は看護師の実践の聴き取り、大阪における子育て支援のフィールドワーク、精神障がいをもつ人たちのサポートを研究テーマにしている。



○食べることと身の回りの化学物質：ダイオキシン、内分泌かく乱化学物質、化学物質過敏症ってなに？

講演者：三好 恵真子

日時：2018年11月3日（土）14：00～16：00

場所：生涯学習センター（中央図書館北隣）405室

参加者数：33名

【概 要】

人間は、便利さ豊かさを追求するために莫大な人工物質を創り出し利用してきました。今日社会に生きる私たちは、さまざまな化学物質に囲まれ、飲食や呼吸を通じて知らず知らずのうちに体内に取り込んでいます。私たちを不安に駆り立てる内分泌かく乱化学物質、化学物質過敏症とは何か、どんな影響があるのかを環境科学の視点から分かりやすく解説します。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科教授。

大阪市立大学生活科学研究科修了（学術博士）。東京農業大学助手、大阪外国語大学講師、准教授を経て現職。世界各地域の環境問題を扱い、文理を問わず多様な人材が集結するユニークな研究環境を創っています。

○第2回 身近な危機と子どもへのケア～「こころの救急箱」を作ろう～

講 演 者：野坂 祐子

日 時：2018年11月14日（水）10：30～12：00

場 所：應典院 気づきの広場

参加者数：22名

【概 要】

生活のなかでの傷つきや暴力、事故や災害など、子どもの危機は少なくありません。身近な大人もショックを受けて、どう対応したらよいのか迷いがちです。たしかに、こうした危機は子どもの発達に影響を及ぼしやすいものですが、子どもの回復を支えるためにできることはたくさんあります！ワークを通して、ケアの基本を練習しましょう。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科准教授。

博士（人間学）・臨床心理士。トラウマ（心的外傷）のケアについて、学校や施設等で取り組む。「危機は一つの分岐点。子どもの回復や家族全体の成長にもつながります」



○第3回 国際化する教室～子どもたちの学びをどう支えるか？～

講演者：孫 美幸・伊藤 莉央

日時：2018年11月28日（水）10：30～12：00

場所：應典院 気づきの広場

参加者数：19名

【概要】

今日本の学校が国際化しています。大阪の約30%の学校に外国籍の子どもたちが在籍しています。先生たちはどのような難しさに向き合い、子どもたちの学びを支えているのでしょうか。その一端を大阪の学校現場の事例から紹介したいと思います。多文化共生社会での子どもたちの学びに必要な視点についても一緒に考えてみましょう。

【講演者紹介】

孫 美幸

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター講師。
著書に「境界に生きる暮らしのなかの多文化共生」(解放出版社)等がある。小学生の二人の子どもたちから日々「対話」と「共生」の方法を教えるもっている。

伊藤 莉央

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程。

三重大学教育学部卒業後、大阪大学大学院に入学。公立中学校へのフィールドワークを継続して行い、外国にルーツをもつ生徒を指導する側の課題等の調査を行っています。

2019.2.25 毎日新聞 (京都版)

「境界に生きる」著者 孫 美幸さん(44) ③

いのち追う
京できょうを生きる物語

言葉超え多文化共生を

「境界に生きる」著者 孫 美幸さん(44) ③

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター講師。著書に「境界に生きる暮らしのなかの多文化共生」(解放出版社)等がある。小学生の二人の子どもたちから日々「対話」と「共生」の方法を教えるもっている。

「境界に生きる」著者 孫 美幸さん(44) ③

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター講師。著書に「境界に生きる暮らしのなかの多文化共生」(解放出版社)等がある。小学生の二人の子どもたちから日々「対話」と「共生」の方法を教えるもっている。

○第4回 子どもの事故予防 ～冬、年末年始の事故から子どもを守る～

講演者：岡 真裕美

日時：2018年12月12日（水） 10：30～12：00

場所：應典院 気づきの広場

参加者数：16名

【概要】

「子どもはケガをして成長する」と言われますが、その時我が子に想定しているのは軽傷ではありませんか？しかし、事故が起これば、軽傷で済むか重篤な事故になるかは確率の問題。事故は誰にでも起こり得ます。本講座は、特に冬、年末年始に起こりやすい子どもの事故事例をご紹介します、その予防と対策について考えます。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科安全行動学研究分野特任研究員。

2012年、川で溺れていた見ず知らずの子どもの救助に当たった夫を亡くしたことから現研究科に入学。子どもの事故予防をテーマに研究や安全啓発活動を行う。メディアにも多数登場。



○「食べる」ことをみつめる臨床心理学：こころと食のアラカルト

講演者：竹田 剛・佐々木 淳

日時：2018年12月16日（日） 14：00～16：00

場所：生涯学習センター（中央図書館北隣）405室

参加者数：33名

【概要】

生きていく上で必要不可欠な「食べる」という行いの中にも、実はその人のこころや人間関係のありようが映し出されていきます。こころや人間関係の健康なあり方とはどのようなものなのでしょうか。誰にでもある身近な「食べる」という行いを糸口に、拒食症や過食症などのテーマも扱いながら、こころと食のつながりについてお話します。

【講演者紹介】

竹田 剛

神戸学院大学心理学部講師。

立命館大学文学部卒業後、大阪大学大学院人間科学研究科修了（人間科学博士）。日本摂食障害協会フェロー。摂食障害を抱える方へのカウンセリングと、よりよい治療法の研究に日々取り組んでいます。

佐々木 淳

大阪大学大学院人間科学研究科准教授。

京都大学卒業後、東京大学大学院総合文化研究科修了（学術博士）。認知行動療法の立場から、会社におけるメンタルヘルス向上のための活動を行っています。ちなみに茨木市在住です。

○薬と共に生きる：一錠に詰め込まれた世界

講演者：モハーチ＝ゲルゲイ

日時：2019年2月3日（日）14：00～16：00

場所：生涯学習センター（中央図書館北隣）405 室

参加者数：41 名

【概 要】

サプリメントやビタミンから抗糖尿病薬まで、薬類は私たちの暮らしに欠かせない存在となっています。こうして私達の毎日の生活を支える「くすり」ですが、実は世界の様々な人々の価値観や経験、悩みを反映させた物として理解することができます。今回は「くすり」がつなぐ、地球の様々な文化と人々の暮らしについて、文化人類学という学問の視点からご紹介します。たった一錠に詰め込まれた世界を一緒に旅してみませんか？

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科准教授。

専門は文化人類学。慢性病をめぐる文化、身体、科学技術との相互作用を研究しています。近年は、西日本と北ベトナムでのフィールドワークをもとに、生薬の栽培と研究開発から地球と身体の健康を結びつける可能性を探ります。



○「多言語・多文化で生きる子どもたち」

講 演 者：孫 美幸

講 演 者：カルロス・オチャンテ

演奏ゲスト：千葉 泉

日 時：2018 年 3 月 3 日（日）14：00～16：00

場 所：comm cafe（箕面市立多文化交流センター内）

参加者数：43 名

【概 要】

ニューカマーの子どもたちは言語のこと、アイデンティティのこと、自分が受けている教育のこと、どんなふうに思い、どんな壁にぶつかっているのでしょうか。彼らの将来はどうなっていくのでしょうか。当事者である講師が自分の体験と研究を交えながらお伝えします。また、多文化共生の視点から、多様な文化背景をもつ人々を認め合う教育のあり方についても一緒に考えてみましょう。ペルーの楽器を使ったミニ演奏会もあります。

【講演者紹介】

孫 美幸

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター講師。

専門は日・韓の平和教育、多文化共生教育。著書に「境界に生きる 暮らしのなかの多文化共生」（解放出版社）等がある。小学生の二人の子どもたちから日々「対話」と「共生」の方法を教えてもらっている。

カルロス・オチャンテ

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程 1 年生。

1996 年にペルーより来日。ニューカマーの子どもたちの教育問題と外国語教育を研究している。これまで、異文化理解・人権教育を支援する活動をしてきた。

千葉 泉

大阪大学大学院人間科学研究科教授。

専門はラテンアメリカ地域研究とその実践的応用。「自分らしさ活用」の観点から、共生的な社会を実現する方法について、音楽や語り合いの実践を通じて研究している。



10 箕面まなびのカフェとコンポジウム

講演者：孫 美幸

講演者：カルロス・オチャンテ

演奏ゲスト：千葉 泉

福田てれさ恵（外国語学部外国語学科スペイン語専攻1回生）

日時：2018年3月3日（日）14：00～16：00

場所：comm cafe（箕面市立多文化交流センター内）

参加者数：43名

【概要】

コンポジウムとは、音楽を楽しむコンサートと講話・議論を主とするシンポジウムを組み合わせたプログラムを意味している。講演では、ニューカマーの子どもたちは言語のこと、アイデンティティのこと、自分が受けている教育のこと、どんなふうに思い、どんな壁にぶつかっているのか、彼らの将来はどうなっていくのか、当事者である講師が自分の体験と研究を交えながら伝えた。また、多文化共生の視点から、多様な文化背景をもつ人々を認め合う教育のあり方についても参加者と一緒に考えた。ペルーの楽器を使ったミニ演奏会では、「マチカネ・ワニ・ソング」「SI SOMOS AMERICANOS」「コンドルは飛んでいく」「OLE, HOLA!」を、会場の参加者と一緒に合唱し、音楽を通して多文化共生を体感する時間をもった。

【講演者紹介】

孫 美幸（そん みへん）

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター講師。専門は日・韓の平和教育、多文化共生教育。著書に「境界に生きる 暮らしのなかの多文化共生」（解放出版社）等がある。小学生の二人の子どもたちから日々「対話」と「共生」の方法を教えてもらっている。

カルロス・オチャンテ

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程1年生。1996年にペルーより来日。ニューカマーの子どもたちの教育問題と外国語教育を研究している。これまで、異文化理解・人権教育を支援する活動をしてきた。

千葉 泉

大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門はラテンアメリカ地域研究とその実践的応用。「自分らしさ活用」の観点から、共生的な社会を実現する方法について、音楽や語り合いの実践を通じて研究している。

人間科学研究科附属未来共創センターが中心となって、「シリーズ人間科学」を刊行することになり、2017年3月に第1巻『食べる』を大阪大学出版会から刊行した。人間科学部が日本最初の学部として大阪大学に設立されたのは1972年であった。それから50年近く経過し、私たち大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科の教員・研究者はそれぞれの専門性を深めると同時に、他の学問領域の視座も取り入れることで、人の心、身体、暮らし、社会、共生を探究しながら、それぞれが自らの「人間科学」を作り上げようとしている。その成果を多くの方々に触れていただくために「シリーズ人間科学」を刊行することにした。そして、「シリーズ人間科学」は人間科学部設立当時からある「人間科学とは何ですか？」という疑問への現時点における私たちからの回答の一つである。

2018年度は、第1巻の『食べる』に続いて、第2巻『助ける』、第3巻『感じる』をそれぞれ刊行した(2019年3月刊行)。刊行に際しては下記の手順で進めた。「シリーズ人間科学編集委員会」(各講座から1名の計8名、委員氏名は次ページ下部を参照のこと)において、責任編集者とタイトルを決めた。その後、責任編集者が執筆者10名程度に依頼し、執筆者から提出していただいた章タイトルと概要を基に、責任編集者が本の構成をはかり、企画書を作成した。各巻において、執筆者の半数以上は人間科学研究科の教員であることを条件としている。責任編集者に作成していただいた企画書を、シリーズ人間科学編集委員会で審議し、承認したのち、大阪大学出版会委員会に提出した。大阪大学出版会委員会からは、すでに「シリーズ人間科学」刊行の承認を得ているが、同時に同委員会からの各巻の承認も必要となっている。したがって、「シリーズ人間科学編集委員会」から各巻の企画書を大阪大学出版委員会に提出し、承認を得て、各章の執筆を開始してもらっている。

このようにして、第1巻ができ、もうすぐ第2巻、第3巻が完成しようとしている。そして、2019年2月末までに、第4巻『学ぶ・教える』と第5巻『病む(仮題)』の刊行の承認を大阪大学出版会委員会から得ている。

従って、2019年度には少なくとも2巻の刊行が行える予定である。さらに、『老いる』、『争う』などの次の企画も進んでいる。責任編集者として、あるいは執筆者として、この「シリーズ人間科学」の刊行にご協力いただければ幸甚である。

第2巻、第3巻の内容は下記のとおりである。

シリーズ人間科学 第2巻「助ける」(責任編集者：渥美・稲場)

第1部 「助ける」のフィロソフィー

- | | |
|--------------------------|-----------------|
| 第1章 「助けることの哲学」 | (檜垣 立哉・哲学／現代思想) |
| 第2章 「調査研究の中立性から「かわりあい」へ」 | (栗本 英世・社会人類学) |
| 第3章 「助ける宗教」 | (稲場 圭信・宗教社会学) |

第2部 「助ける」のフィールド

- 第4章 「男性性と助けられること」 (山中浩司・文化社会学)
第5章 「「共助」のカー差別の現場で一」 (高田 一宏・教育文化学)
第6章 「国境を越えて助けることとは」 (杉田 映理・国際協力学)

第3部 「助ける」のサイエンス

- 第7章 「道具・技術が人間を助ける場合・助けない場合」
(篠原一光・応用認知心理学)
第8章 「助けるサル、助けないサル」 (山田 一憲・比較行動学)

第4部 「助ける」のアート

- 第9章 「カウンセリングにおける助ける工夫」 (井村 修・臨床心理学)
第10章 「支援者は生存を肯定し、変化を促す触媒となる」
(村上 靖彦・現代思想)
第11章 「災害ボランティアが重ねてきた工夫」 (渥美 公秀・ボランティア集団力学)

シリーズ人間科学 第3巻「感じる」(責任編集者：入戸野・綿村)

第Ⅰ部 一人で感じる

- 第1章 ずれを感じる (入戸野 宏, 基礎心理学)
第2章 存在を感じる (北村 昭彦, 応用認知心理学)
第3章 音を感じる (青野 正二, 環境行動学)
第4章 好みを感じる (富田 瑛智, 基礎心理学)

第Ⅱ部 人と人の間で感じる

- 第5章 他者を感じる (上野 将敬, 比較発達行動学)
第6章 他人の目を感じる (寺口 司, 社会心理学)
第7章 リスクを感じる (中井 宏, 安全行動学)
第8章 正義を感じる (綿村 英一郎, 社会心理学)

第Ⅲ部 地球規模で感じる

- 第9章 国を感じる (鈴木 彩加, 社会環境学)
第10章 異文化を感じる (孫 美幸, 未来共創センター)
第11章 音楽を感じる (千葉 泉, 共生社会論)

「シリーズ人間科学」編集委員会委員 (アイウエオ順。敬称略、**編集委員長、*副編集長)
渥美 公秀、河森 正人、白川 千尋*、中澤 渉、中道 正之**、入戸野 宏、野村 晴夫、
山中 浩司

OOS とは：

今、様々な社会的課題の解決に向けて、大学と企業、行政、民間組織などが連携して「共創」することが必要とされている。人間科学研究科附属「未来共創センター」は、人々が支え合い、共生できる「場」を創出することを目指すプロジェクトのひとつとして、その「共創」の仕組みを「大阪大学オムニサイト (OOS)」と名付け、2017 年 4 月に始動させた。OOS では、産官社学連携により、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社团・地方自治体・NPO/NGO などの活動の「場」を支援、活用する。

OOS の目指すもの：

OOS の活動を通して得られた様々なデータを収集・分析し、共創知の創出および今後の運営に活用する。また、データ収集・分析に学生が参画するなど、教育・研究実践の場も提供する。将来的にはこれらのデータをもとに AI で、商品、書籍、セミナー・イベント情報などを提供していく。企業・行政・一般市民・研究機関・学生それぞれにとって実りのある「場」を提供できるような仕組みづくりを目指している。

連携組織一覧（協定締結日）：

一般社団法人 全国自治会活動支援ネット（2017 年 5 月 15 日）、一般社団法人 全国寺社観光協会（2017 年 5 月 15 日）、一般社団法人 今井町大和観光局（2017 年 7 月 5 日）、岩手県九戸郡野田村（2018 年 2 月 11 日）、パナホーム株式会社（2018 年 3 月 30 日、なお 4 月 1 日よりパナソニックホームズ株式会社と社名変更）、新安世紀教育安全科技研究院（2018 年 8 月 2 日）、北いわて未来ラボ（2018 年 8 月 2 日）、日本災害救援ボランティアネットワーク（2018 年 8 月 2 日）、ジャトー株式会社（2018 年 9 月 26 日）、NTN 株式会社（2018 年 12 月 27 日）

2018 年度の活動一覧

- ・ 連携組織との OOS 協定調印式・意見交換
- ・ OOS 協定締結シンポジウム「人科生と災害：防災、救援、復興支援」（2018 年 8 月 2 日）
（人間科学研究科ラーニングコモンズにて）：新安世紀教育安全科技研究院 院長 張 国遠氏が登壇し、渥美 公秀 未来共創副センター長のコーディネートで「中国における災害 NGO の活動」の講演を行った。また、認定 NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク 理事 寺本 弘伸氏、新安世紀教育安全科技研究院 張 敏氏、通訳 林 亦中氏、NPO 法人北いわて未来ラボ 理事 神先 真氏、貳又 正貴氏が登壇し、「人科生と災害救援 大阪北部地震 西日本豪雨災害救援の現場から」、「人科生と災害復興 四川大地震の現場で学ぶ」、「人科生と新しい防災 東日本大震災の経験からキャンパスへ」の話題提供を行った。
- ・ JATO 株式会社との調印式と記者発表（2018 年 9 月 26 日）（人間科学研究科インターナショナルカフェにて）：OOS 協定の調印に先立ち、川端 亮 研究科長が人間科学研究科の紹介を、志水 宏吉 未来共創センター長が未来共創センターおよび大阪大学オムニサイト、本

協定に関する説明を行った。OOS 協定調印後には、協定締結を受けて、JATO の小野謙治代表取締役社長が挨拶を行った。続いて、JATO の持つ音響・映像・情報・セキュリティー技術に関する高度な専門的知識を活用した共同研究について JATO の小野謙治代表取締役社長が説明をした。最後に、川端 亮 研究科長が今後に向けての展望と閉会の挨拶をした。調印式と記者発表の運営には人科の院生・学生が設営スタッフとして参加した。



大阪大学大学院人間科学研究科・ジャトー株式会社 大阪大学オムニサイト(OOS)協定調印式
(2018 年 9 月 26 日：人間科学研究科会議室 B)

(左から) 志水 宏吉 未来共創センター長、川端 亮 人間科学研究科長、
小野 謙治 ジャトー株式会社代表取締役社長、二宮 清 ジャトー株式会社顧問、
宮本 哲也 ジャトー株式会社取締役常務



2018 年 10 月 15 日 (月) 日刊ケイザイに掲載

- ・「野田学」第1回セミナー（2018年9月30日）（野田村にて）：木村 友美 助教が食と健康にかんする情報との向かい方について講演を行った。



2018年10月6日（土）デーリー東北に掲載

- ・NTN 株式会社との調印式（2018年12月27日）（人間科学研究科会議室Bにて）：川端 亮 研究科長と NTN 株式会社の梅本 秀樹 自然エネルギー商品事業部長が協定書に署名した。



大阪大学大学院人間科学研究科・NTN 株式会社 大阪大学オムニサイト（OOS）協定調印式
（2018年12月27日：人間科学研究科会議室B）

（左から）稲場 圭信 教授、川端 亮 人間科学研究科長、
梅本 秀樹 NTN 株式会社自然エネルギー商品事業部長、
石原 伸洋 NTN 株式会社自然エネルギー商品事業部・西日本販売統括

- ・未来共創センター公開シンポジウム 第1回「知と人のキュレーションで創る共生社会」(2019年1月17日)(人間科学研究科キャノピーホールにて):まず、川端 亮 研究科長、小川 哲生 理事、稲場 圭信 教授、パナソニックホームズ株式会社の上田 眞 街づくり事業部分譲事業推進部長、渥美 公秀 未来共創副センター長、全国自治会活動支援ネットの幸田 栄長 理事長が登壇した。その後、渥美 公秀 未来共創副センター長のコーディネートでパネルディスカッションを行った。パネリストは野田村の小田 祐士 村長、日本災害救援ボランティアネットワークの寺本 弘 伸常務理事、NTN株式会社の石川 浩二 執行役員、栗本 英世 副学長、稲場 圭信 教授。



(写真左: 川端 亮 人間科学研究科長 写真右: 小川 哲生 理事)



(写真左: 上田 眞 パナソニックホームズ株式会社街づくり事業部分譲事業推進部長)

(写真右: 幸田 栄長 一般社団法人全国自治会活動支援ネット理事長)



(左から) 稲場 圭信 教授、栗本 英世 教授、石川 浩二 NTN 株式会社・執行役員、
寺本 弘伸 日本災害救援ボランティアネットワーク常務理事、
小田 祐士 岩手県九戸郡野田村・村長、渥美 公秀 未来共創副センター長

Ethnography Lab は、(1) 人間科学研究科におけるフィールド調査教育、(2) エスノグラフィを介した自然科学・工学と人文社会科学の協働（文理融合）、(3) エスノグラフィを通じたビジネス、公共セクターとの協働（社会学連携）を推進するとともに、(4) トロント大学との国際研修を実施し、エスノグラフィを介した国際教育のプラットフォームを構築することを目的として活動している。

本年度は、教育活動において大きな成果を上げ、人間科学研究科共通科目「フィールド調査教育共通プログラム（仮称）」を開発した。また、東大社会基盤工学専攻を軸にした文理融合でも持続的に成果を上げている。新たな領域である社会学連携については、本年度はコペンハーゲン大学、オーフス大学、京都大学とのコラボレーションを通して主に探索的な調査を行い、山口情報芸術センターともコラボレーションのための話し合いを開始した。

上記の研究活動の成果のもとにして、トロント大学との国際研修の開発を行ない、2019 年 5 月の開催を目指して準備中である。

代表的な活動の詳細は以下の通りである。

【教 育】フィールド調査法共通教育プログラムの開発

社会学・人間学系と共生学系が共同開講する新共通科目「フィールド調査法特講」と、社会学・人間学系が提供する既存の二科目と合わせて、初級（観察とインタビュー）から上級（民族誌の執筆とデータの統合）までを網羅するプログラムを 2019 年度より提供する予定である。Ethnography Lab はプログラムのコーディネートを担当する。科目群の概要は以下の通り。

「フィールド調査法特講」（初級）：森田、高谷、モハーチ、杉田

- 調査法の基礎、参与観察とインタビュー、調査計画の基本

「人間科学方法論演習」（中級）：樋口（非）、川端

- 質的データ分析、grounded theory、理論的サンプリング

「応用人類学特講」（上級）：鈴木（非）

- 民族誌執筆のテクニック、理論的概念と質的データの統合

【教 育】フィールド調査教育パイロット・プロジェクトの実施

フィールド調査法教育プログラムの策定のため、人類学の 3 年生と 4 年生を対象としたパイロット・プロジェクトを実施した（森田、鈴木、神崎）。パイロット・プロジェクトの効果は、白川と福岡によって人類学の論文指導の場で検証された。両名から得られたフィードバックは、森田、高谷、モハーチ、杉田、鈴木によってフィールド調査法教育プログラムのデ

ザインに利用された。

【教 育】上級国際ワークショップ

博士課程とポスドク以上を対象とした民族誌執筆についての国際ワークショップを12月に、高度な質的データ分析についての国際ワークショップを3月に開催予定である。鈴木が、これらのワークショップで得られた知見に基づいて、フィールド調査法科目群で用いる一連の教材の開発を行った。

【社会学連携】エスノグラフィを用いた企業・NGO とのコラボレーション

2000年代以降、IT企業やサービス産業を中心に、エスノグラフィをイノベーションやマーケティングに用いる動きが活発化している。Ethnography Labでは、人間科学研究科の研究者が、こうした活動に従事する可能性の検討を行っている。具体的には、組織論研究者の山内（京都大学）の協力を得て、日本国内での社会科学とビジネスのコラボレーションの現状をサーヴェイするとともに、コペンハーゲン大学・人類学科の協力を得て、デンマークにおける先進事例の調査、ノウハウの移転を行った。また、北陸先端科学技術大学院大学から研究者を招聘してのワークショップも開催した。

公共部門とのコラボレーションについては、山口情報芸術センターにおけるオープン・サイエンス活動とのコラボレーションの可能性が明らかになり、実現化の方策について鈴木が検討を行っている。

【国際連携】トロント大学との国際研修の開催準備

上記の文理融合研究などの成果に基づいて、国際研修の内容の準備を行った。また、阪大周辺におけるフィールドトリップのための調査、トロント大学からの参加者の受け入れ態勢の準備、RAのトレーニングなどを行った。

再来年度以降、本研修を人科単独科目として継続させるために、人科院生の側の需要や関心の調査も行っている。また、大学院レベルでの英語教育との連携についても調査を開始した。

（文責 森田 敦郎）

14 海外インターンシップ・ボランティア

人間科学研究科では、中期目標・計画の中に「国際インターンシップ・ボランティア」の項目を設けており、また、国際性の涵養、フィールドでの教育機会の充実の観点から、学生の海外への派遣を検討してきた。未来共創センターでは、設立時よりその実現の可否を様々な観点から検討してきたが、①渡航する学生の安全の確保（教員の引率の必要性も含めて）、②渡航費の問題、などの理由から実現は困難と考えられていた。しかし、2016 年度に JICA との連携の可能性が浮上し、上記の 2 点の懸念が解消されることから、2017 年度、2018 年度に準備を行い、2019 年度より、学生 4 名（うち 1 名は 3 か月、3 名は 1 か月間）をアフリカのタンザニア連合共和国に派遣する計画の実現に至った。

【事業概要】

1. 目的

- ① JICA が行うボランティア事業に大学の知見・人材を活用し、タンザニア連合共和国イララ県における青少年の健全な育成を図る。
- ② 人間科学研究科未来共創センターの海外ボランティア・インターンシップ事業として、国際的な活動に関わる人材の育成に資する。

2. 対象

短期ボランティア 4 名（うち 1 名は 3 か月、3 名は 1 か月）× 3 年

大阪大学の学部生、大学院生、卒業生、教職員、その他関係者など、応募時に満 20 歳以上の者

3. 内容

イララ県の複数の小・中学校において、衛生・健康に関するレクチャー、ワークショップ、レクリエーション、啓発イベントなどを行う（職種：公衆衛生）。

【2018 年度に実施した活動および 2019 年度の活動予定】

2018 年 11 月下旬 タンザニアイララ県への訪問（岡田）

2018 年 12 月 連携協定調印

2018 年 12 月 6 日 研究科内募集説明会、学内募集開始

参加者 13 名（2 回 2 名、3 回 2 名、4 回 4 名、M14 名、M21 名、
行動 3 名、社会人間 2 名、教育 3 名、共生 4 名、他学部 1 名）

2019 年 1 月 18 日 研究科内応募書類提出締切

2019 年 2 月 7 日 学内面接、選考

2019 年 3 月 JICA による選考

2019 年 4 月 可否発表

2019 年 4 月	候補者に対する事前研修
2019 年 5 月	派遣前訓練 [3 日～5 日]
2019 年 6 月下旬	隊員派遣 (3 か月) 開始
2019 年 8 月	隊員派遣 (1 か月) 開始
2019 年 9 月～10 月	事後評価および単位認定

【 JICA 大学連携ボランティア ワーキンググループメンバー 】

中野 良彦 准教授 (未来共創センター・行動学系)、白川 千尋 教授 (社会・人間学系)、
岡田 千あき 准教授 (未来共創センター・教育学系)、杉田 映理 准教授 (共生学系)、
孫 美幸 講師 (未来共創センター)

15

大阪府教育委員会と大阪大学の協働による 「外国にルーツをもつ府立高等学校生徒への支援」

【事業の内容】

大阪府の府立高等学校に在籍する外国にルーツをもつ生徒に対し、学校における学習および生活を支援するべく、大阪大学の学生を「多言語学習支援員」として各高等学校に派遣する。

【これまでの経緯と本年度の成果】

大阪府の府立高等学校には外国にルーツをもつ生徒が数多く在籍しており、日本語が十分に理解できない、日本の学校の文化や生活習慣に馴染めない、進路に関わる悩みがあるなど、学習および生活上のさまざまな困難を抱えている。大阪府教育委員会ではこのような生徒を支援するシステムを整え、府立高等学校でもそのシステムを活用しようと努めてきたが、個々の生徒の母語に通じかつその特性や事情に応じた適切な支援人材を確保することが困難であった。

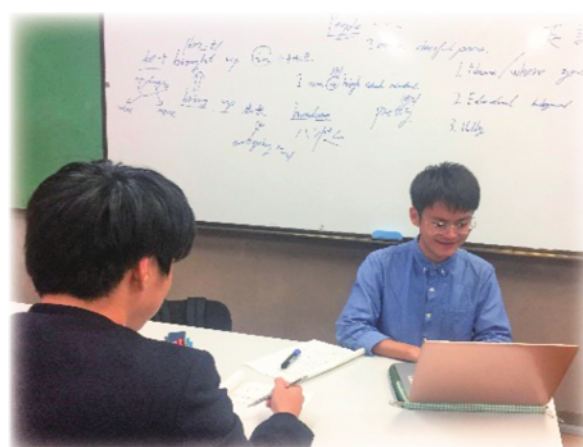
そこで本事業では、大阪大学と大阪府教育委員会が連携し、各高等学校から示された個々の生徒のニーズに応じて、大阪大学の学生（大学院生、研究生、研修生等を含む）を「多言語学習支援員」として各高等学校に派遣する。派遣される学生は、各高等学校の教員と連携・協働しながら、学校における生徒の学習および生活を支援する。

平成 2017 年 11 月～平成 2018 年 2 月にかけてこの事業の試行を実施し、3 校の府立高等学校に対し、4 人の学生を派遣した。この試行を受けて、本年度は「多言語学習支援員指導員」の枠を設定し、教育学を専攻する大学院生に支援員となった学生をフォローしてもらえるようにした。そのために必要な「支援に関する確認事項」という、支援員と指導員が注意すべき事項についてまとめたリリースレットも作成した。

本年度は、野崎高校に1名（支援する生徒は2名）、春日丘高校（定時制）に1名、勝山高校に1名、西成高校に1名、支援員を派遣した。いずれの支援員も、日本語教育・指導の専門教育を受けているわけではないが、個々の生徒の母語に通じ、かつ生徒の担任教員や大学の指導教員と相談・協議しながら生徒を支援したことにより、各高等学校の教育、とりわけ生徒指導・生活指導に少なからず貢献することができた。特に、比較的年齢の近い学生が関わることで生徒の精神的な安定や活性化に繋がるなどの効果が得られることが各高等学校および大阪府教育委員会から高く評価され、今後も事業の継続が望まれている。

ところで、本年度秋、高等学校のオープンスクールや学校説明会に参加する中学生に対する支援が十分ではないことが判明した。来年度からは、オープンスクールや学校説明会に参加する中学校3年生を対象とする支援についても検討したい。

（文責 岡部美香）



16 ^{かす}仮留める、^{かさ}仮想ねる——津波に流された写真の行方

2011年に発生した東日本大震災に際しては、津波によって流された写真を拾い集め、元の持ち主に返そうという活動が次々に生まれた。「被災写真救済活動」と呼ばれるこうした活動は、被災した人々の「思い出」をサルベージする〔引き揚げる、救い出す〕もので、被災した人々が新たな生活を「過去と地続きのもの」として歩みだすという意味において大きな役割を果たしている。

だが、こうした被災写真救済活動はいま岐路を迎えている。発災から8年を迎えようとする現在、返却されなかった被災写真は行く場を失い、「お焚き上げ」というかたちで焼却されるものも少なくない。

本展示は、損傷が激しいために持ち主の判別が難しいと判断された写真を並べ、それを見る人に、会ったことも、もはや会うこともないであろう誰かの生に触れてもらうことを期したものである。写真を手がかりにして、ありふれた、しかしかけがえのない日常が不意に断ち切られたことを想像し、いつかどこかで降りかかるかもしれない／降りかからないかもし

れない震災体験をかさねてみてもらう。少し遠くから、数多くの写真をひとつのまとまりとして眺めてみてもらう。あるいは、そこに近づき、一枚一枚に目を凝らしてみてもらう。それぞれの距離から、写真を「仮留め」、自分の人生と「仮想ねる」ことで、そこに確かにあった生の記憶を継承する。

記憶の継承の在り方に関して新たな技法を模索する社会実験を試みたのが本展示である。

2019年2月23日〔土〕－24日〔日〕全日10:00～21:00

ららぽーと EXPOCITY 光の広場（大阪府吹田市千里万博公園 2-1）

〔主催〕 大阪大学人間科学研究科附属未来共創センター／日本災害復興学会学術推進委員会／思い出サルベージ

〔協力〕 大阪大学共創機構社会学共創本部／LOST & FOUND PROJECT／名古屋文理大学映像デザイン研究室

開催日は両日も、ららぽーとの「光の広場」を訪れたほぼすべての人々が、被災写真を「仮留め」ていった。ららぽーとの来場者は、土曜日がだいたい6万人、日曜日がだいたい9万人であることを考えると、いったい何人の人々が被災写真を「仮留め」ていったのか。

一方で、声や文字のメッセージを残してくださった方々もいた。熱心に写真に見入っている人々に、スタッフの院生・学生が声をかけ、心に引っかかった写真1枚を教えてもらう。それを、インスタント・カメラで撮影し、できた写真をスケッチブックに貼りつけて、思いのままに感想などを綴ってもらう。このような感想の残し方に88人もの方々が協力してくださった。

他にも、ミュージアム、芸術関係者からは、「ミュージアムでも、ギャラリーでもできない、これまでにない展示」「展示を見るために来たわけではない人に印象づけるという点で成功している」との評価をいただいた。

この成果は、企画者3人で論文にまとめる予定である。

（文責 岡部美香）



17 未来共創フィールド実習 I

本授業は、春～夏学期に学部3、4年次の学生を対象に実施した。講義題目は「日本の中山間地をフィールドワークする」である。本授業は、フィールドに出て、地域に暮らす人びとと接し、現状を知り体験することを通して、現場から考え行動する姿勢を身につけることを目指しており、大学での研究・学修と、人々の暮らし・現場を結びつけるという未来共創センターの目標に沿った授業となっている。この授業では、フィールドワークの手法を身に付けるとともに、日本の中山間地の現状を俯瞰的に理解することをめざしており、前半では授業形式で事前学習を行うとともに、後半では8月下旬に高知県四万十市でフィールドワークを行った。授業の到達目標およびスケジュールは以下のとおりである。

[到達目標]

- ① フィールドワークの手法を身に付ける。
- ② 日本の中山間地の現状について、生活、産業、福祉などの観点から俯瞰的に理解できる。
- ③ 中山間地の課題解決手法を他の地域に応用できる。

[スケジュール]

1. ガイダンス
2. 事前学習・フィールドワークの手法1
3. 事前学習・フィールドワークの手法2
4. 事前学習・フィールドワークの手法3
5. 事前学習・調査地の概要1
6. 事前学習・調査地の概要2
7. 事前学習・フィールドワーク計画の作成
- 8-14. フィールドワーク（高知県四万十川流域の集落にて生活・産業・福祉等の観点から実施）
15. まとめ

次にフィールドワークであるが、1日目は、「いつでも・誰もが・自由に集える介護予防の場」を目標に掲げる、四万十市多目的デイ・ケアセンター「一条の里」（四万十市の市街地・中村に立地）を訪ねた。いきいき百歳体操への参加、社協職員によるプレゼンのあと討論を行った。最後に、利用者に対する聞き取りを行った。

2日目午前は、四万十市口鴨川地区を訪ねた。生活課題と地区活動に関する住民によるプレゼン（かつての漁労の様子を記録した動画をふくむ）のあと、討論を行った。その後、グループに分かれて聞き取りを行った。2日目午後は、四万十市秋田地区を訪ね、グループに分かれて聞き取りを行った。同日夜は地区の集会所、住民宅に分かれて宿泊し、夜遅くまで住民との交流を深めた。

3日目は四万十市久保川地区を訪ね、住民による地区の祭りについてのプレゼンのあと質疑応答を行った。その後、生活上の課題等についての聞き取りを行った。外部（社協やボランティア団体）の介入によって希薄化した住民間のつながりが復活したという事例についての考察を深めることができた。

2018年度に本センターで活動した学生たちの活動内容に応じて、「人間科学学際実習Ⅰ・Ⅱ」「総合人間科学実習Ⅰ・Ⅱ」「総合人間科学特別実習Ⅰ・Ⅱ」の単位認定を行った。本年度は、2名が単位申請し、単位を取得することができた。

1. 授業概要

本センターが企画・運営する講座や課外活動等の事業の参加を通して、研究成果の一般社会への還元方法や対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力等の実践的能力を身に付ける。

2. 授業目標

企画力、マネージメント力、発信力、対話力、主体的行動力等を養い、研究や実践活動に応用することができる。

3. 単位認定

(1)～(4)の単位を総計して2単位以上で、上記科目の単位を認定する。

(1) ランチトークスタッフ（企画力、マネージメント力、対話力、主体的行動力）

2タームに相当する期間、ランチトークスタッフとして自ら進んで企画・運営に携わる。企画・運営の方法を説明し、主体的に行動することができる。

【認定単位 2】

(2) まなびのカフェ、コンポジウム等のスタッフ（企画力、マネージメント力、発信力、対話力、主体的行動力）

1回のまなびのカフェ等のスタッフとして、自ら進んで企画・運営に携わり、会場等で報告や討論等を行う。企画・運営の方法を説明し、主体的に行動することができる。必要に応じて自分の研究等を一般の人々に平易な言葉で説明できる。

【認定単位 0.5】

(3) 小・中・高大連携の活動（企画力、発信力、対話力）

小・中・高校での出前授業等で、自ら企画に関わった1回の発表を行う。自ら企画し、自分の研究等を一般の人々に平易な言葉で説明できる。

【認定単位 0.4】

(4) 発表（発信力、対話力）

出前授業、まなびのカフェ等で比較的短時間の発表を1回行う（企画には直接関わらない）。自分の研究等を一般の人々に平易な言葉で説明できる。

【認定単位 0.3】

注1 単位は認定のみで、成績評価はしない。

注2 複数学期にわたって単位を合算することができる。

注3 終了時に報告書、(1)についてはレポートを提出する。

注4 大阪大学から謝金を支給された活動は、単位認定の対象とならない。

◆ 原田 優（人間科学部 行動学科目 生物人類学 4年）

未来共創センターの活動を知ったきっかけは高校生の研究室訪問のお手伝いでした。その際に研究室の先生に紹介していただき、それ以来活動に携わらせていただいています。元々大学での学び以外にも様々なことにチャレンジしてみたいと思い、海外で音楽を通したボランティア活動等をしていた私にとって新たな挑戦の場でした。

教員志望の私にとって、中学校での出張授業は貴重な経験になりました。進路キャリア、大学進学をテーマに、中学生に大学を身近なものに感じてほしいという思いから、演劇を取り入れて自分が中学生だった時から現在に至るまでの話をしました。どのようにしたら興味を持って楽しく聞いてもらえるかを考え、実践することは教壇に立つための授業準備と似ており、教育実習で学んだことを活かす機会となり、また、教員としてのスキルアップに繋がったと感じています。さらに、自分の人生を顧みることによって自己を見つめ直す良いきっかけにもなりました。

未来共創センターの活動を通して様々な人に出会い、一緒に活動していくことで新たな発見があり、「人とのつながり」ができていくことを感じています。また、それぞれの人がそれまで活動してきたことを強みに自分らしく活動できることも面白いと思っています。未来共創センターで授業とはまた違った面白さを感じ、成長してみませんか？

◆ 有木 彩華（人間科学研究科 臨床教育学講座 教育コミュニケーション学 修士前期課程2年）

「未来共創センターで、お手伝いしてみませんか？」と同じ研究室の方に声をかけられたことがきっかけでした。

初めて私が参加したイベントは應典院を会場に開催された「まなびのカフェ」で、【まなび×カフェ】の組み合わせに興味を持ったことを覚えています。

それまで、私は「まなび」は、学生だけのものと考えていました。しかし、会場には子を持つ母親や父親、地元の高齢者、様々な世代の方たちが訪れており、どの方も真剣に先生のお話を聴いていらっしゃいました。私はそこで会場の設営や受付を行い、親御さんがお話を聴いている間、お子さんと一緒に遊びました。

お子さんが應典院にあった玩具の名前や遊び方を次々に覚え、オリジナリティのある遊び方も見つけているのが非常におもしろいと感じました。来場者の方だけでなく、そのお子さんも私も「まなび」を得たのかもしれない。

未来共創センターで開催しているイベントは、「まなび」を楽しいものとして捉えています。未来共創センターとのかかわりの中で、人は些細なことから、まなびを得ることができること、そして生きる上でまなび続けることの必要性に気づくことができました。

人間科学部・研究科にはまだまだ様々な「まなび」や「発見」がねむっていると思います。皆さんも、未来共創センターで自分自身も知らない「まなび」を発掘してみませんか？

◆ 川崎 はるか（人間科学研究科 社会環境学講座 コミュニケーション社会学 博士前期課程2年）

大学院生活では人前で話す機会やコミュニティ外の方と関わる機会を増やしたいと思い、進学時にセンターを訪れました。それから2年、まなびのカフェを中心に未来共創センターの活動に携わっていました。

初めて参加した阪大フェスタでは他専攻の先輩方と一つのテーマについて各々の専攻からアプローチし、一つのプレゼンテーションをつくり上げ、学外の方に向けて発表しました。自分とは全く異なる視点に触れられた貴重な経験です。

老若男女を問わず沢山の方が参加したまなびのカフェでは、イベントの司会進行や、多様なバックグラウンドをもつ参加者とディスカッションをしました。先生や他の学生たちと、どうすれば参加者が心地よいのかを考えながらディスカッションの形式や、机の配置などを終了後に振り返っていくなかで、自分が持っている常識は年齢や立場の違う相手にとっては通じない場面が多々あることに気づきました。さらに、そういった相手の立場に立って考えることの難しさを感じました。また、子育て中のお母さん方の生の声を聴くことができたのは、親子関係やジェンダーに興味のあった自分にとっては嬉しい機会でした。

普段関わりのない他専攻の学生の視点や、大学の中ではなかなか会うことができない方々の話に触れられた未来共創センターの活動には研究や就職活動時に大いに助けられました。未来共創センターの活動を通して、「ジンカ」生活をさらに充実したものにしませんか？

◆ 辻井 岳（人間科学研究科 行動生態学講座 行動統計科学 修士前期課程2年）

残り少ない大学院生活の間に、もっと人間科学部・研究科のことを深く知りたいと考え、未来共創センターの活動に携わるようになりました。私はもともと本学部の行動統計科学研究室に所属しており、大学院入学後も同じ研究室に在籍しています。しかし大学院に入学後、改めて人他分野の講義を受ける中で、本学部・研究科の研究や活動の幅広さと奥深さを実感しました。もともとは、自身の専攻研究への関心が大学院進学の決め手でしたが、こうした背景から「ジンカ」全体の活動に自ら触れる機会を作りたいと考えるようになりました。

私が携わった未来共創センターの活動の一つに、公開講座のお手伝いがあります。この講座では、教授だけでなく外部の方も登壇されることがあり、内外を問わない多角的な視点から人間科学分野の研究への理解を深めることができます。そして、テーマは毎回興味を引く工夫が凝らされており、私が参加した会では「助ける」をテーマに、複数の研究分野の活動内容を横断的に理解することができる内容でした。

また特に驚いたのが、社会人や大学生だけでなく高校生も参加していたことです。講座の最後に参加者同士の交流の時間が設けられており、私は参加していた高校生達に「どうして公開講座に参加しようと思ったのか？」と聞きました。すると、人間科学部の研究に対しての興味があるからと答え、自分が興味を持つ分野について嬉々として話してくれました。私はこうした高校生たちの知的好奇心に尊敬の念を抱くとともに、改めて興味深い研究・活動が数多くある人間科学部・研究科を誇りに思いました。人間科学部・研究科では想像以上に様々な研究や活動がなされています。未来共創センターの活動を通じて、皆さんにもぜひ自分の知らない「ジンカ」を体感していただきたいと思います。



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 **未来共創センター**